宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第２集

天神河内第２遺跡

大淀川右岸農業水利事業国営天神ダム

建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1997

宮崎県埋蔵文化財センター

天神河内第２遺跡

大淀川右岸農業水利事業国営天神ダム

建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1997

宮崎県埋蔵文化財センター

序

宮崎県教育委員会では、九州農政局による国営大淀川右岸農業水利事業天神ダム建設に伴い、昭和63年度から平成２年度まで天神河内第１遺跡の発掘調査を実施いたしました。本書は、その２次調査として平成７年度に実施した天神河内第２遺跡の調査報告書です。

第１遺跡の調査においては、約36,000㎡という広い面積の調査であったのに対して、第２遺跡では、約420㎡という狭い面積の調査でした。しかし、配石遺構や集石遺構のほか縄文時代早期の下剝峰式土器や中期の春日式土器など貴重な資料が検出されました。

本書が、埋蔵文化財に対する理解と認識を深める一助となるとともに、学術・研究の資料として、社会教育や学校教育の場で活用されることを期待します。

調査に際しまして御協力いただいた九州農政局をはじめ関係機関、御指導・御助言いただいた諸先生方、並びに地元の方々に厚く御礼申し上げます。

平成９年３月

宮崎県埋蔵文化財センター

所長　藤　本　健　一

例　　言

1．本書は、九州農政局が宮崎郡田野町字天神河内に計画した国営天神ダム建設に伴う事前調査として、宮崎県教育委員会が実施した天神河内第２遺跡の発掘調査報告書である。

2．本書に使用した位置図は、国土地理院発行の５万分の１図をもとに作成し、周辺地形図については、九州農政局大淀川水利事務所作成の５千分の１および千分の１図をもとに製図、作成した。

3．本書は、層序に従って古い時代から順に報告している。

4．現地調査に関する実測及び写真撮影は松林豊樹がおこなった。ただし、空中写真撮影及び多角点・水準点測量は各々業者に委託した。

5．遺物・図面の整理は、宮崎県埋蔵文化財センターで行い、遺物の実測、拓本、計測及び製図等については、松林のほか整理補助員の協力を得てこれをおこなった。

6．遺物の写真は松林が撮影した。

7．本書に使用した方位は主に磁北であり、位置図などは一部座標北である。

8．土器の色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局ほか監修の「新版　標準土色帳」の土色に準拠した。

9．本書の執筆は主として松林が行い、一部（第Ⅰ章第１節）を永友良典が行った。編集は松林が行った。

10．天神河内第２遺跡に関する遺物・図面等は、宮崎県埋蔵文化財センターに保管している。

本　文　目　次

第Ⅰ章　はじめに……1
　第１節　調査に至る経緯……1
　第２節　調査の組織……1
　第３節　遺跡の地理的・歴史的環境……2

第Ⅱ章　調査の概要および層序……4
　第１節　調査の概要……4
　第２節　層序……4

第Ⅲ章　Ⅵ・Ⅶ層の遺構と遺物……8
　第１節　遺構……8
　第２節　土器……11
　第３節　石器……18

第Ⅳ章　Ⅳ層の遺構と遺物……21
　第１節　遺構……21
　第２節　土器……21
　第３節　石器……24

第Ⅴ章　Ⅱ層の遺構と遺物……27

第Ⅵ章　おわりに……27

挿　図　目　次

第１図　天神河内第２遺跡の位置と周辺の遺跡……3
第２図　天神河内第２遺跡土層図……4
第３図　天神河内第２遺跡周辺地形図(1)……5～6
第４図　天神河内第２遺跡周辺地形図(2)……7
第５図　Ⅶ層検出遺構及び遺物分布図……9
第６図　Ⅶ層検出遺構及び出土遺物実測図……10
第７図　Ⅶ層出土土器実測図(1)……11
第８図　Ⅶ層出土土器実測図(2)……13

第９図　Ⅶ層出土土器実測図(3)……14
第10図　Ⅶ層出土土器実測図(4)……16
第11図　Ⅶ層出土土器実測図(5)……17
第12図　Ⅶ層出土土器実測図(6)……18
第13図　Ⅶ層出土石器実測図(1)……19
第14図　Ⅶ層出土石器実測図(2)……20
第15図　Ⅳ層検出遺構及び遺物分布図……22
第16図　Ⅳ層検出遺構実測図(1)……23
第17図　Ⅳ層検出遺構実測図(2)……24
第18図　Ⅳ層出土土器実測図……25
第19図　Ⅳ層出土石器実測図……26
第20図　Ⅱ層出土土器実測図……27

表　目　次

第１表　石器観察表(1)……８
第２表　土器観察表(1)……11
第３表　土器観察表(2)……12
第４表　土器観察表(3)……14
第５表　土器観察表(4)……15
第６表　土器観察表(5)……20
第７表　石器観察表(2)……25
第８表　土器観察表(6)……25
第９表　石器観察表(3)……27
第10表　土器観察表(7)……27

第Ⅰ章　はじめに

第１節　調査に至る経緯

農林水産省九州農政局大淀川農業水利事務所では、大淀川右岸に広がる宮崎市及び宮崎郡の田野町と清武町の１市２町にまたがるおよそ2,000haの耕地に畑地灌漑や水田用水補給を行う新たな水源開発のためダム建設を計画し、田野町と北諸県郡山之口町の境を流れる大淀川支流の境川に天神ダム建設を進めていた。ところが、昭和63年２月にダム建設工事区域で土器の散布が見られたことから県教育委員会では土器の散布地周辺の試掘調査をおこなったところダム本体の建設予定地及び周辺の水没地域で縄文時代と中世の遺跡（天神河内第１遺跡）が確認された。そこで昭和63年から平成２年にかけて発掘調査をおこない、平成３年３月に調査報告書を刊行した。

さらに、昭和63年の確認調査の際にダム本体建設予定地より200ｍ程上流の右岸段丘の切土断面でも縄文土器の散布が確認されたことから、県教育委員会ではこの地点を天神河内第２遺跡として遺跡の取り扱いについて大淀川農業水利事務所と協議した。しかし、この一帯がダム建設により水没の影響を受けることから記録保存の措置をとることとなりダム本体工事が本格化する平成７年までに発掘調査をおこなうこととした。県教育委員会では平成７年度に発掘調査を計画し、遺跡のうち削平を免れて残っている約300㎡（文化層が２枚で600㎡）について平成７年11月10日から平成８年２月29日にかけて発掘調査を実施し縄文時代早期と中期の遺構・遺物を検出した。発掘調査で出土した遺物等の整理作業を平成７年度及び８年度におこない、報告書を平成８年度に刊行することとした。

第２節　調査の組織

調査の組織は以下のとおりである。

調査依頼者　　九州農政局大淀川水利事務所

平成７年度（現地調査）

調査主体	宮崎県教育委員会		
	教育長	田原　直廣	
	教育次長	中田　　忠	八木　　洋
	文化課長	江崎　富治	
	課長補佐	田中　雅文	
	主幹兼庶務係長	高山　惠元	
	主幹兼埋蔵文化財第二係長	岩永　哲夫	
調査担当者	埋蔵文化財第二係	松林　豊樹	
事務担当者	庶務係	高山　惠元	宮越　　尊
	埋蔵文化財第一係	永友　良典	
	埋蔵文化財第二係	吉本　正典	
調査協力	田野町教育委員会		
	山之口町教育委員会		

平成８年度（整理調査および報告書作成）

調査主体	宮崎県埋蔵文化財センター	
	所長	藤本　健一
	副所長兼調査第一係長	岩永　哲夫
	庶務係長	三石　泰博
	調査第二係長	北郷　泰道
調査担当者	調査第二係	松林　豊樹
事務担当者	庶務係	吉田　秀子
		磯貝　政伸
	調査第二係	谷口　武範
		重山　郁子

第３節　遺跡の地理的・歴史的環境

天神河内第２遺跡は、宮崎郡田野町大字天神字天神河内に所在する。

遺跡は、田野町と山之口町の町境を流れる境川右岸の標高290ｍ内外の河岸段丘縁辺部に位置し、周辺は地形的に険しい山岳地帯であるが、その中にあっては比較的恵まれた立地といえる。

以下、天神河内第２遺跡周辺の歴史的環境について記すが、既に刊行された天神河内第１遺跡報告書に詳しいので、ここでは最近の調査成果をもとに田野町内に限って縄文時代を中心とした各時代ごとの概略にとどめる。

旧石器時代

町内において現在確認されているこ時期の遺跡は少ない。代表的なものとしては、昭和58年から59年に調査された芳ケ迫第１・第３、札ノ元遺跡がある。この３遺跡では、ＡＴ（姶良丹沢火山灰）を含む礫層の上の層からナイフ形石器、剝片尖頭器、三稜尖頭器などとともに、掘り込みを持たない集石遺構が検出されている。

縄文時代

草創期の遺跡としては、芳ケ迫第３、砂田、井手ノ尾遺跡があり、爪形文土器の破片がそれぞれ出土している。

早期の遺跡は多くが調査されており、代表的な遺跡としては前平遺跡群（芳ケ迫第１・第２・第３、札ノ元遺跡）や八重地区遺跡群（砂田・権現谷第１・第２・前畑第１・第２・第３遺跡）がある。これらの遺跡では、貝殻文円筒系土器や押形文土器、塞ノ神式土器など早期全般に渡る様々な形式の土器を出土するが、特に貝殻文円筒系土器の終末頃に位置付けられる下剝峰式土器に豊富なバリエーションがみられる。

前期～中期の遺跡としては、黒草第１遺跡、丸野第２遺跡、長藪遺跡、権現谷第１遺跡、天神河内第１遺跡で前期の曽畑式土器や轟Ｂ式土器が、天神河内第１遺跡でいわゆる春日式土器などの中期の土器が検出されている。

後期～晩期の遺跡としては、砂田遺跡で指宿式、天神河内第１遺跡で松山式といった後期の土器が出土し、晩期の遺跡は、未だ確実なものはない。

弥生時代

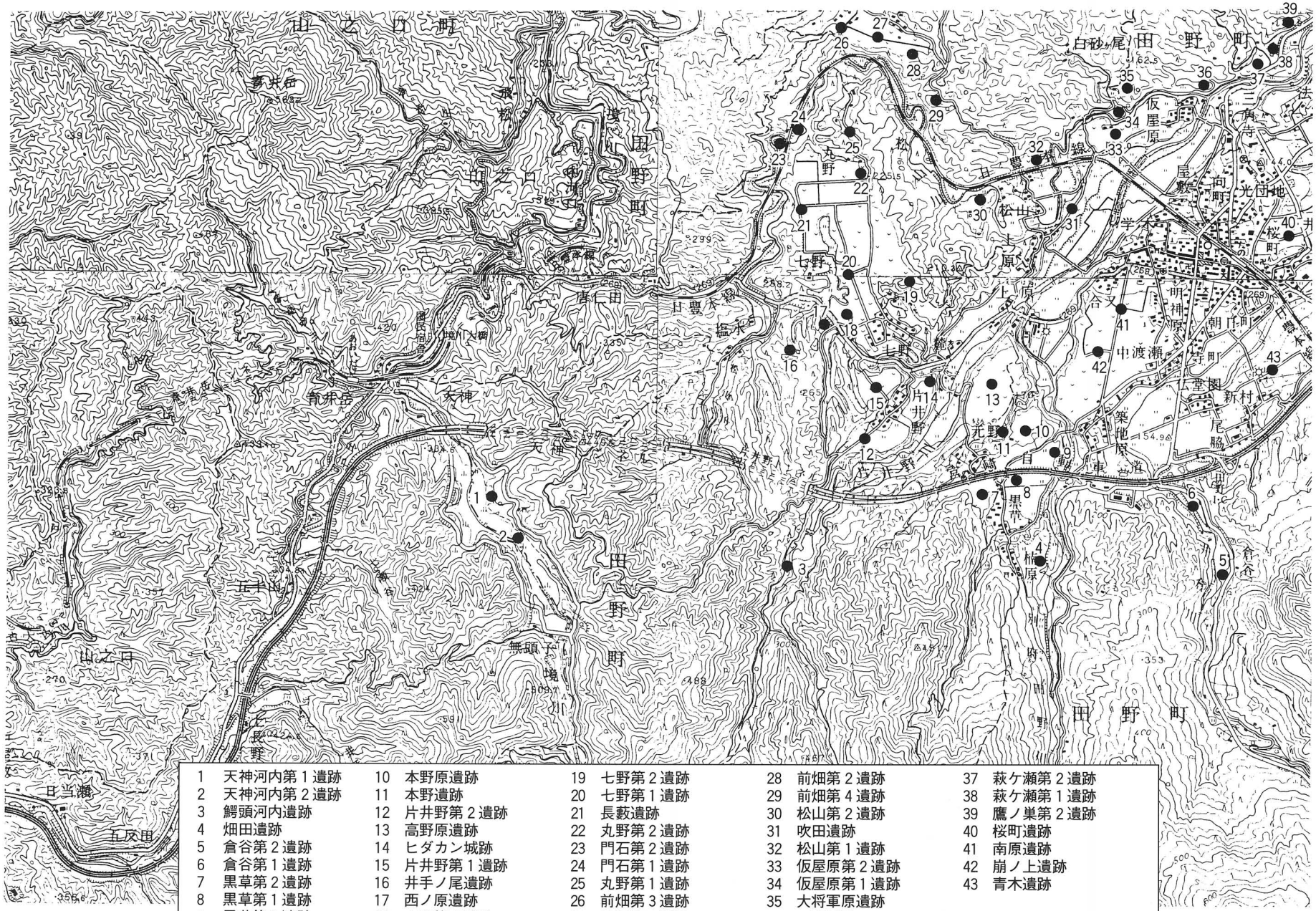
弥生時代では前期の遺跡は知られていないが、丸野第２遺跡で中期後半から後期前半、天神河内第１遺跡で中期から後期、権現谷第１遺跡で後期初頭、黒草遺跡で終末の遺構・遺物が検出されている。

古墳時代

古墳時代の遺跡として集落跡は知られていない。ただしこの時期の墓制である地下式横穴墓が高野原で１基、灰ケ野で２基調査されている。

古代以降

古代以降の遺跡でこれまでに調査されたものは天神河内第１遺跡のみだが、平安時代頃とみられる遺物の散布地は数カ所知られている。また、顕在遺構として伝承されているヒダカン城跡、田野城跡、梅谷城跡などの中世山城跡がある。



第１図　天神河内第２遺跡の位置と周辺の遺跡

第Ⅱ章　調査の概要および層序

第１節　調査の概要

天神河内第２遺跡は前章でも述べたように、境川右岸の標高290ｍほどの河岸段丘縁辺部に立地する。この段丘は、ダム建設用の道路によって削平され、調査を開始した時点で既に島状に取り残された形となっていた。さらに、巨大な破砕礫を借り置きする場所として利用されていたため、実際に調査が可能な面積はごく限られたものであった。調査を実施した総面積は約420㎡である。

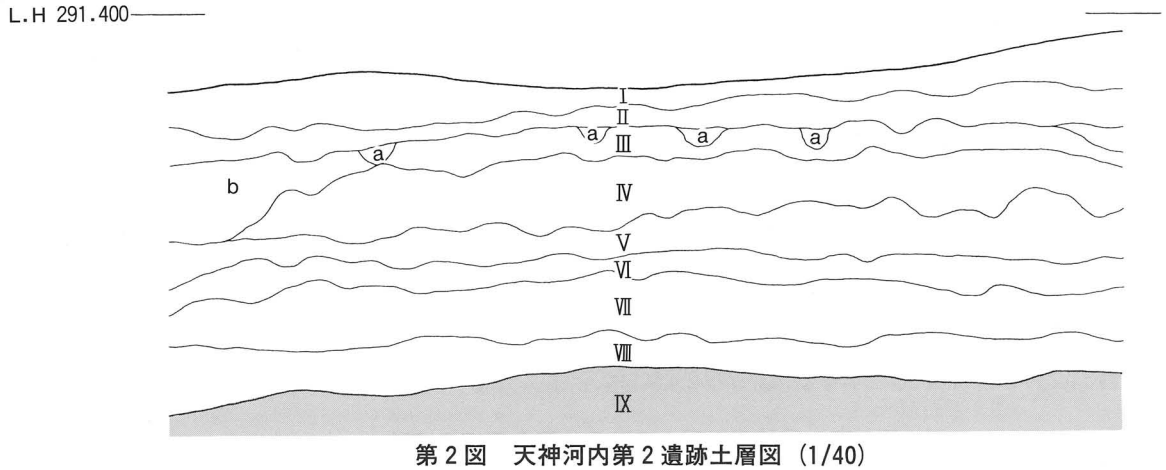
天神河内第１遺跡では、調査の結果３層の遺物包含層が確認されていたため、本調査地においても同様の状況が予想された。そこで、まず２カ所のトレンチを掘り、調査区内の土の堆積状況を確認した。その結果、確かに３つの遺物包含層は確認できたが、最も上の包含層であるⅡ層が、樹根などによる著しい撹乱を受けていた。このⅡ層中からは、数点の土器破片が出土したのみであった。

Ⅱ層以下については比較的良好な残存状態であり、Ⅳ層とⅦ層中から縄文時代の遺物が確認された。遺構としては、Ⅳ層で集石遺構１基、土坑３基を、Ⅶ層で集石遺構１基、配石遺構１基を検出した。

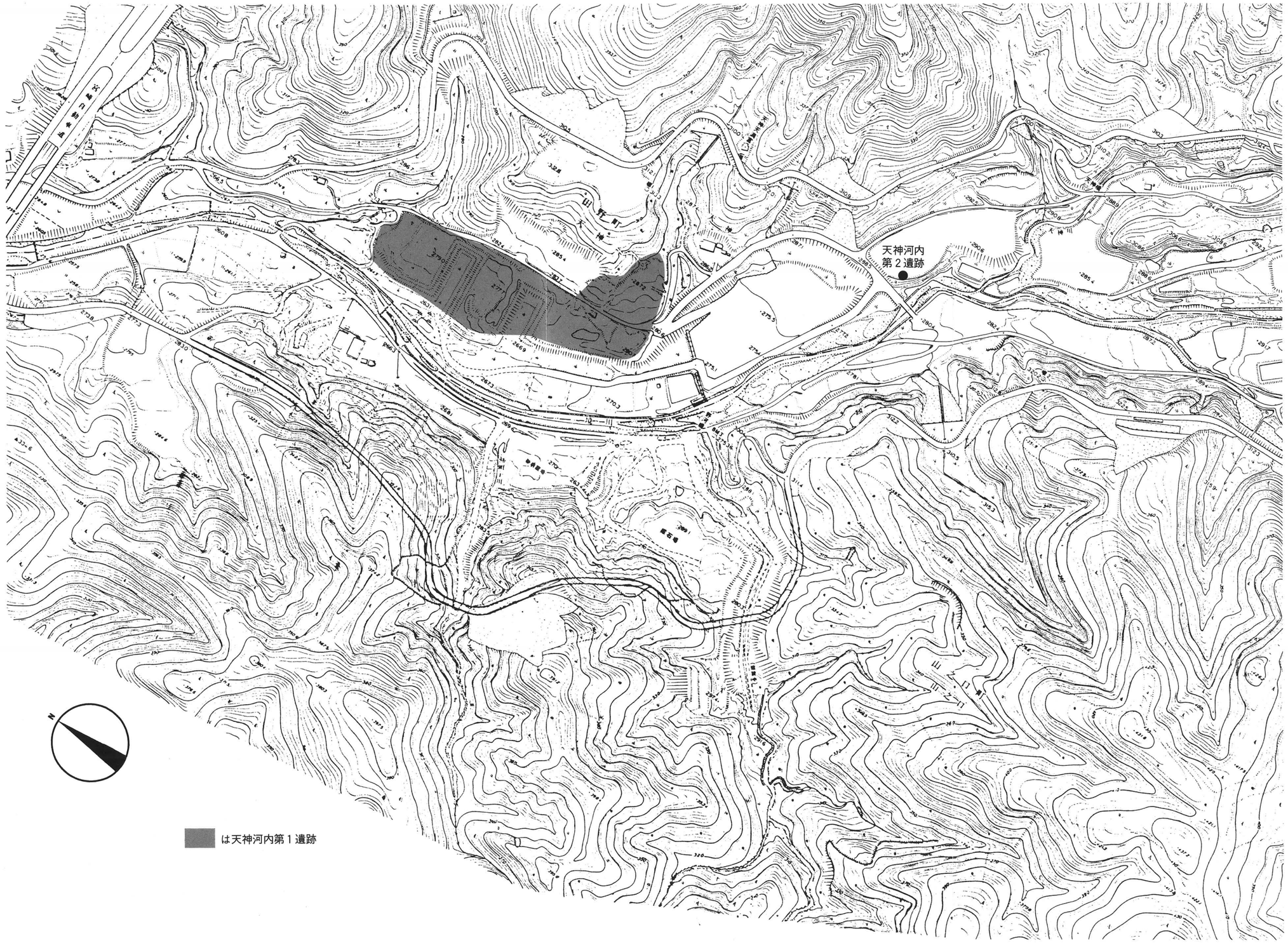
第２節　層序

本遺跡における層序は、天神河内第１遺跡とほぼ一致した。しかし、第１遺跡報告にあるⅧ層（黒褐色シルト質土）は本遺跡ではみられなかった。また、同報告においては、いわゆる牛之脛ロームをⅥ層（暗褐色シルト質土）の一部としているが、本報告では分層している。各層については以下のとおりである。

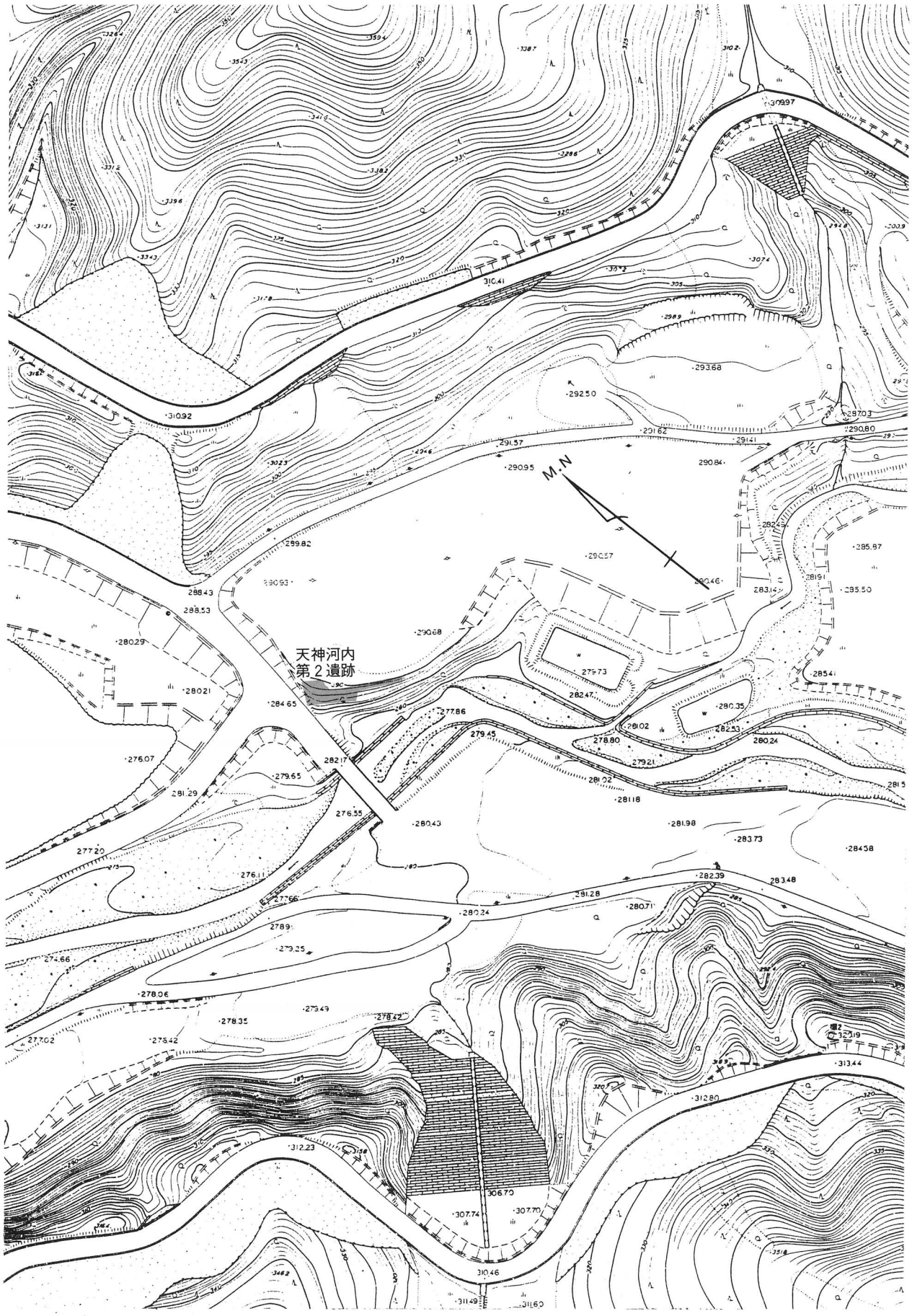
Ⅰ層　黒色土　　しまりの無い腐食土。
Ⅱ層　暗褐色シルト質土　（遺物包含層）
Ⅲ層　暗黄色軽石　　いわゆる御池ボラと呼ばれる降下軽石（一次堆積）。
Ⅳ層　暗黄褐色シルト質土（遺物包含層）
Ⅴ層　暗黄色土　　いわゆるアカホヤ火山灰（一次堆積）。
Ⅵ層　青灰色シルト質土　いわゆる牛之脛ロームで非常に硬質。
Ⅶ層　暗褐色シルト質土　（遺物包含層）
Ⅷ層　褐色シルト質土　　Ⅸ層ブロックをわずかに含む
Ⅸ層　暗黄白色粘質土　　湿気が強く、小礫を多く含む。いわゆる小林軽石の可能性がある。
ａ層　暗黄褐色土　　Ⅱ層とⅢ層が１：１の割合の混合土。樹根などによる撹乱とみられる。
ｂ層　暗黄褐色土　　Ⅱ層とⅢ層が１：２の割合の混合土。樹根などによる撹乱とみられる。



第２図　天神河内第２遺跡土層図（1/40）



第３図　天神河内第２遺跡周辺地形図①（S=1/5000）



第4図　天神河内第2遺跡周辺地形図②（S=1/2000）

第Ⅲ章　Ⅶ層の遺構と遺物

第１節　遺構

Ⅶ層から検出された遺構は集石遺構１基、配石遺構１基であった。ただし、第５図に示したとおり火熱により赤く変色したとみられる礫がかなり高い密度で平面的にひろがっていた。この礫の広がりに関しては諸般の事情から範囲と写真の記録のみに止めた。また、この礫を除去後、その下部分を精査したが、掘り込みなどの付帯する遺構は検出されなかった。

配石遺構

後述する１・２号集石遺構とは遺構を構成する礫の大きさや密度がかなり異なり、礫が意識的に配置されている印象を受けたので、ここでは配石遺構という呼称で報告する。

長軸約１ｍ、短軸約70㎝、深さ15㎝の楕円形で深さ15㎝の掘り込みを有する。ただし、実測図を見ても明らかなように遺構が構築された面は検出面よりも20㎝前後上と考えられる。掘り込み南半部に30㎝程の大きな礫を半円形に２～３段配し、北半部は開口したような状況であった。礫はとくに変色してはおらず、掘り込み埋土にも炭化物などはあまりみられなかった。

遺構を構成する礫に１点（第６図１）と埋土中から１点（第６図２）の石器が出土している。

１は打製石斧とみられる。ほぼ短冊形を呈し、短・長側面それぞれ１面に刃部が造られている。短側面の刃部は片刃、長側面の刃部は両刃で、共に使用による摩耗が激しい。

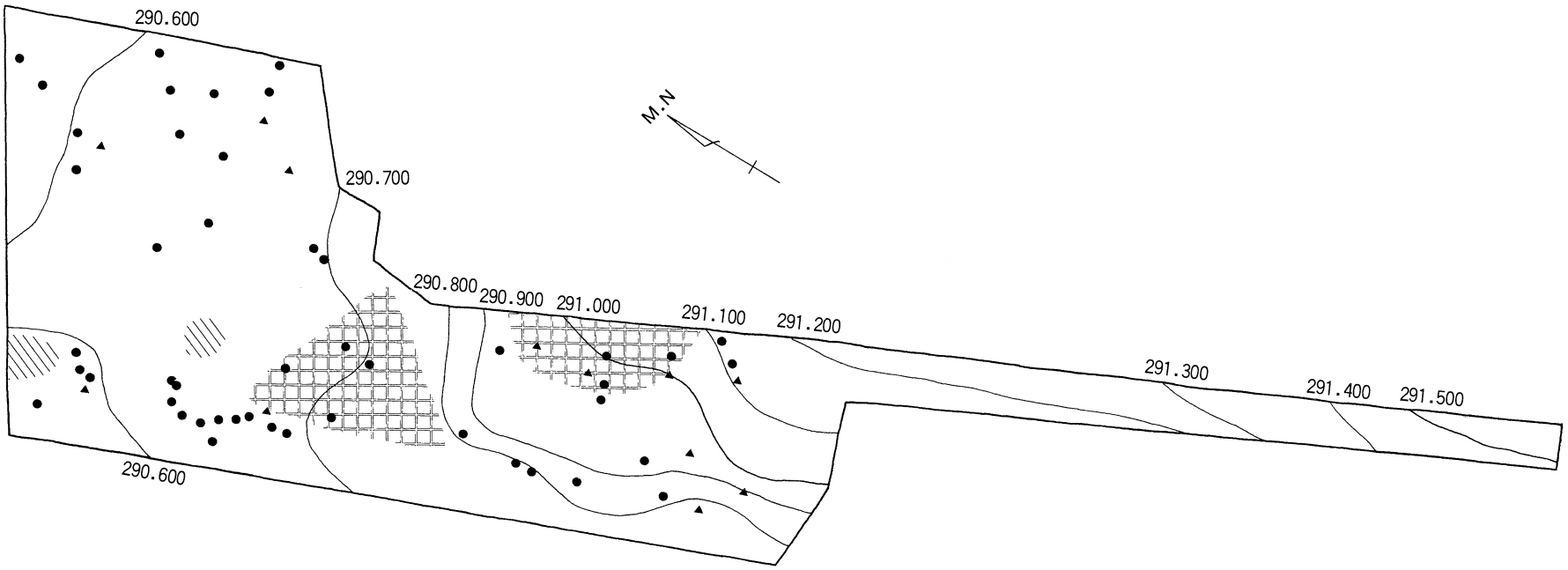
２はチャートを石材とする石鏃で基部のえぐりが無く、一部欠損がみられるがほぼ二等辺三角形である。

１号集石遺構

１号集石は掘り込みは持たず、40㎝ほどの礫数個と５～10㎝ほどの礫数十個が直径１ｍほどの円形に偏平な広がりとして検出された。構成礫は角礫が多く、火熱の影響を受けたためか赤色に変色し、礫間の埋土には炭化物が多くみられた。遺構は東側に広がることが予想されたが、調査区の設定上検出はできなかった。また、遺構埋土からの出土遺物はなかった。

第１表　石器観察表

No	挿図	図版	器種	石材	最大長(㎝)	最大幅(㎝)	最大厚(㎝)	重量(ｇ)	備考
1	第６図	5	打製石斧	砂岩	13.4	6.5	1.55	185	
2	〃	5	石鏃	チャート	2.2	1.4	0.5	0.9	



※ ////// は集石遺構

⊞ は礫のひろがり

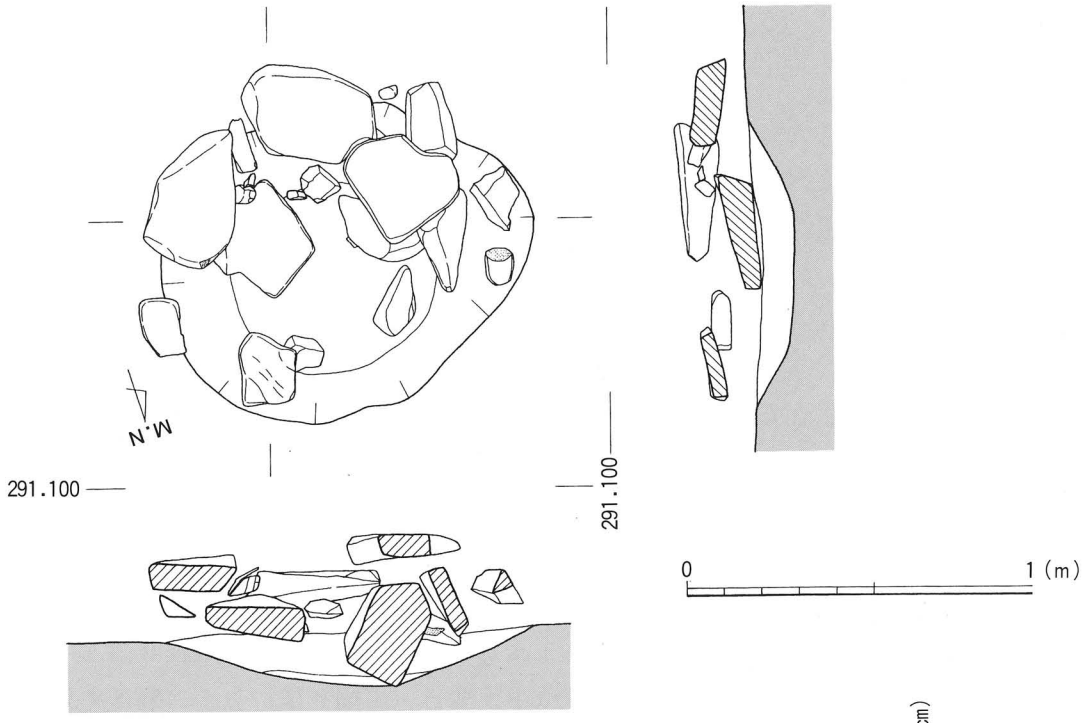
● は土器

▲ は石器　　を表す

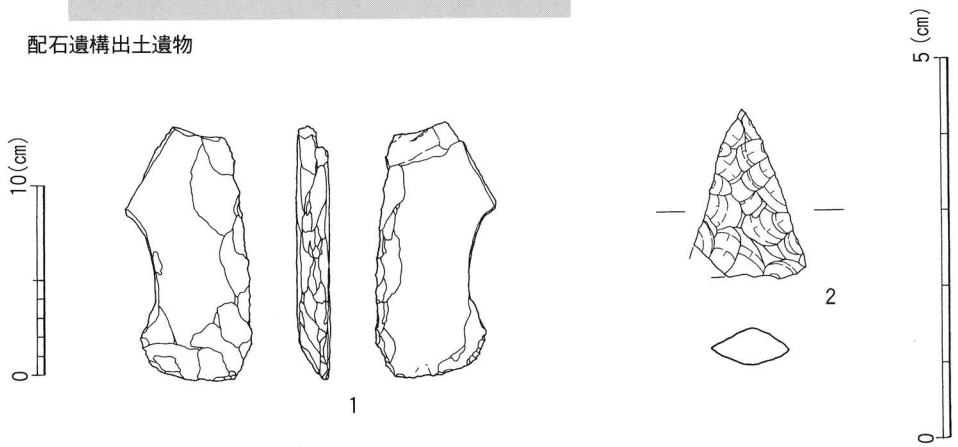
0　　10(m)

第５図　Ⅶ層検出遺構及び出土遺物分布図

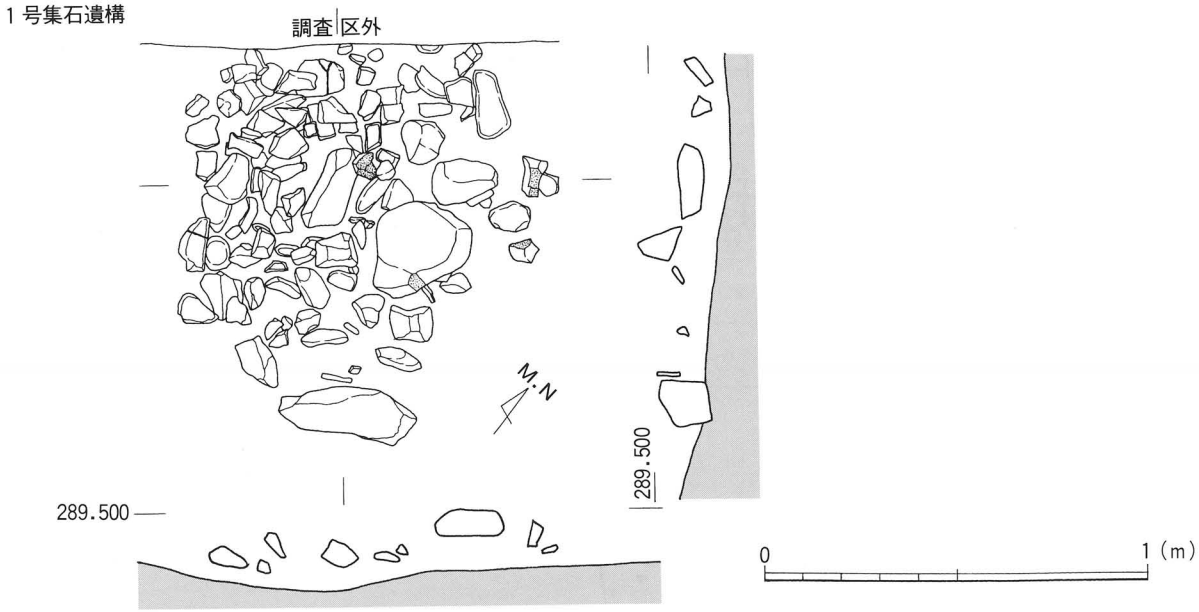
配石遺構



配石遺構出土遺物



1号集石遺構



第6図　Ⅶ層検出遺構及び遺構内出土遺物実測図

第２節　土器

Ⅶ層出土の土器は、以下のように分類した。なお、詳細は土器観察表を参照されたい。

Ⅰ類土器（第７図１）

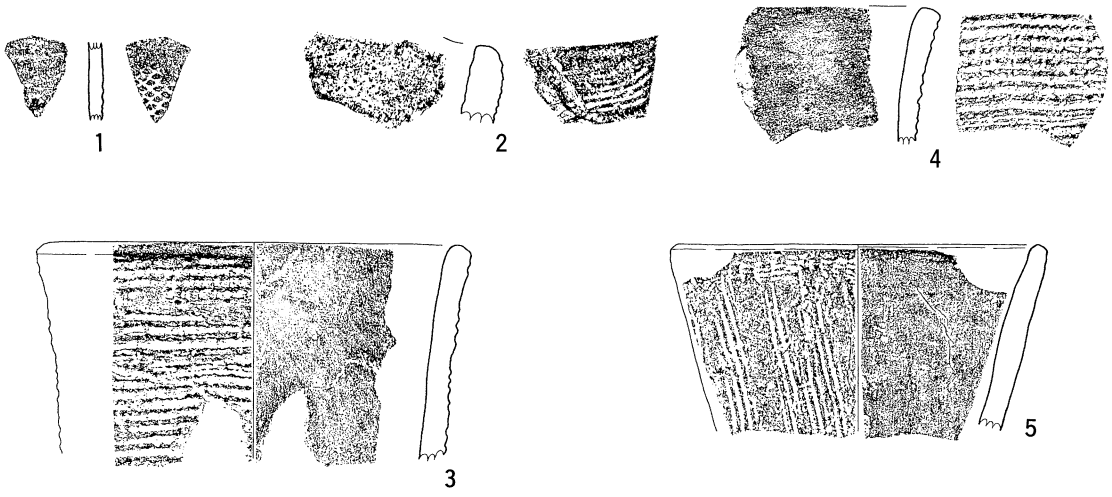
楕円押形文土器である。深鉢形土器の胴部上半とみられるこの土器には細かい楕円押形文が横位に施文され、その上位に無文帯がみられる。押形文土器としてはこれ以外にⅤ類土器の中に山形押形文を施したもの（第９図17）がみられるが、器形および施文方向の相違が伺われたため、ここでは別類として扱った。今回の調査では、この破片１点のみ出土している。

Ⅱ類土器（第７図２～４）

いわゆる「条痕文円筒土器」と呼ばれる熊本県を中心として分布する土器である。３、４は外面に横方向の粗い条痕を施し、やや外反しながら口縁部へと立ち上がる。２はやや内湾気味に立上がり、口縁部は波状を呈する。また、２の外面に施された条痕は３、４と比較するとやや細く、口縁部にあわせて波状となっている。

Ⅲ類土器（第７図５）

胴部に比べて口縁部付近でやや薄くなり、底部が狭まる器形のものである。口縁部外面に１段の貝殻復縁による押し引き状の刺突を巡らす。その下に斜め方向の条痕が不定間隔に施されている。内面は丁寧なナデ調整で、ミガキに近い。口縁部外面の刺突は「前平式土器」に類似しているが、今回の調査で出土しているものには早期前葉の土器は無く、鹿児島県の榎崎Ａ遺跡で出土している「石坂式土器」の中に類似した資料がみられることから、ここではどちらかの可能性を提示するに止める。



第７図　Ⅶ層出土土器実測図(1)　0　10(cm)

第２表　土器観察表(1)

No	挿図	図版	出土地点	文様・調整 外面	文様・調整 内面	色調 外面	色調 内面	胎土	焼成	備考
1	第７図	5	Ⅶ	楕円押型文、ナデ	ナデ	にぶい褐(7.5YR5/4)	黒褐(5YR2/1)	0.5㎜以下の石英を含む	良好	
2	〃	5	〃	横方向の条痕文	ナデ	にぶい黄褐(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	2.5㎜以下の灰白色、褐色の砂粒1.5㎜以下の角閃石、１㎜以下の石英を含む	〃	
3	〃	5	〃	〃	ナデ	淡黄(2.5Y8/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	４㎜以下の灰白色、褐色の砂粒２㎜以下の角閃石、１㎜以下の石英を含む	〃	
4	〃	5	〃	波状を呈する条痕文	ナデ	にぶい赤褐(５YR5/4)	黒褐(2.5Y3/1)	３㎜以下の黒褐色、灰白色、茶褐色の砂粒、１㎜以下の石英を含む	〃	波状口縁
5	〃	5	〃	貝殻復縁による押引き状の刺突文、斜め方向の条痕文	ごく丁寧なナデ	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/3)	１㎜以下の乳白色の砂粒、石英を含む	〃	

Ⅳ類土器（第８図６～16）

いわゆる「下剝峰式土器」と呼ばれる一群で、ここでは器形・施文の違いから４つに細分した。

ａ（第８図６～９）

口縁部が肥厚し、やや内湾気味に直立するもので、外面に横また縦方向の貝殻による刺突文が施されたものである。６は口縁部下に４列ほど横方向の貝殻による刺突文、それ以下にヘラ状工具による不定方向の短沈線文がみられる。

ｂ（第８図10、11）

横方向の刺突文とヘラ状工具による綾杉文が交互に施されたものである。10は３段の刺突文、11は２段の刺突文の間に綾杉文を施している。

ｃ類（第８図12、13）

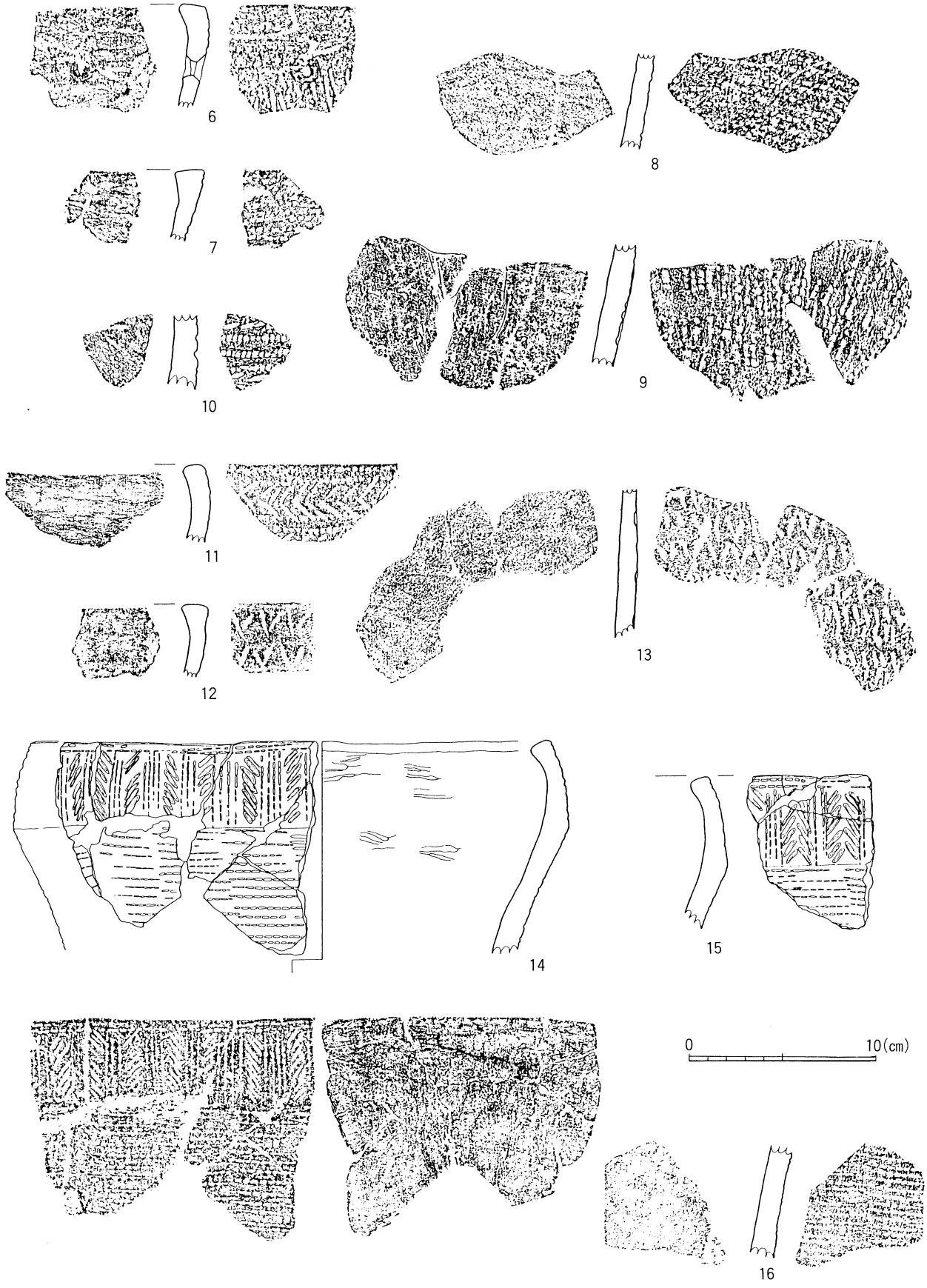
口縁部が肥厚し、やや内湾気味に直立するもので、外面の施文が「Ｖ」字状の短沈線文を巡らせるタイプである。13の下位では短沈線文がかなりくずれた綾杉文風になっている。12、13は同一固体と思われる。

ｄ（第８図14～16）

ａ、ｂ類同様に口縁部が肥厚し、やや内湾気味に直立するが、胴部上位で明瞭な屈曲がみられ、キャリパー状を呈するものである。14、15はこの屈曲を境として上位と下位で異なった施文がみられる。上位の施文帯では口唇部直下に２条の貝殻復縁による刺突文を横方向に巡らし、その下に３、４条の貝殻復縁による刺突文とヘラ状工具による斜め方向の短沈線文が縦方向に交互に施されている。下位の施文は全面に貝殻復縁による刺突文を横方向に巡らせている。14～16はおそらく同一固体と思われるが、15では上位施文帯のヘラ状工具による斜め方向の短沈線文が「ハ」字を呈するため、別固体の可能性もある。

第３表　土器観察表(2)

No	挿図	図版	出土地点	文様・調整		色調		胎土	焼成	備考
				外面	内面	外面	内面			
6	第８図	5	Ⅶ	貝殻復縁による横方向の連続刺突文、短沈線、ナデ	磨き	にぶい黄橙(7.5YR6/4)	にぶい黄橙(10YR6/4)	3.5㎜以下の淡茶色、灰白色の砂粒、１㎜以下の石英、雲母を含む	良好	穿孔有り
7	〃	5	〃	貝殻復縁による横方向の連続刺突文、ナデ	磨き	にぶい黄橙(10YR5/3)	灰黄褐(10YR5/2)	２㎜以下の白色の砂粒、２㎜以下の雲母を多く含む	〃	
8	〃	5	〃	貝殻復縁による横方向の連続刺突文、ナデ	ナデ？	橙(7.5YR6/6)	にぶい黄橙(10YR6/4)	３㎜以下の乳白色、白色の砂粒、１㎜以下の石英を多く含む	〃	
9	〃	5	〃	貝殻復縁による縦方向の連続刺突文	荒いナデ	にぶい褐(7.5YR5/4)	灰黄褐(10YR5/2)	2.5㎜以下の乳白色の砂粒２㎜以下の石英を含む	〃	
10	〃	5	〃	横方向の連続刺突文、くの字状の短沈線文、ナデ	磨き	にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい黄橙(10YR6/4)	２㎜以下の乳白色の砂粒1.5㎜以下の雲母を含む	〃	
11	〃	5	〃	横方向の連続刺突文、くの字状の短沈線文、ナデ	荒いナデ	明赤褐(2.5YR5/6)	明赤褐(５YR5/6)	2.5㎜以下の乳白色の砂粒を含む	〃	
12	〃	5	〃	Ｖ字状の短沈線文、ナデ	磨き	にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい橙(7.5YR6/4)にぶい黄褐(10YR5/3)	２㎜以下の褐色、乳白色の砂粒石英を含む	〃	
13	〃	5	〃	Ｖ字状、逆くの字に近い短沈線文、ナデ	磨き	にぶい橙(7.5YR6/4)	にぶい褐(7.5YR5/4)	1.5㎜以下の乳白色の砂粒１㎜以下の雲母を含む	〃	
14	〃	5	〃	貝殻復縁による横及び縦方向の連続刺突文、斜め方向の短沈線文ナデ	磨き	にぶい黄(2.5Y6/3)	暗灰黄(2.5Y5/2)	２㎜以下の灰白色、赤褐色の砂粒、雲母を含む	〃	
15	〃	5	〃	貝殻復縁による横及び縦方向の連続刺突文、ハの字状の短沈線文、ナデ	磨き	にぶい黄(2.5Y6/3)	にぶい黄(2.5Y6/3)	２㎜以下の灰白色、褐色、赤褐色の砂粒、雲母を含む	〃	
16	〃	5	〃	貝殻復縁による横方向の連続刺突文、ナデ	磨き	にぶい黄(2.5Y6/4)	にぶい黄(2.5Y5/2)	２㎜以下の灰白色、赤褐色の砂粒、雲母を含む	〃	

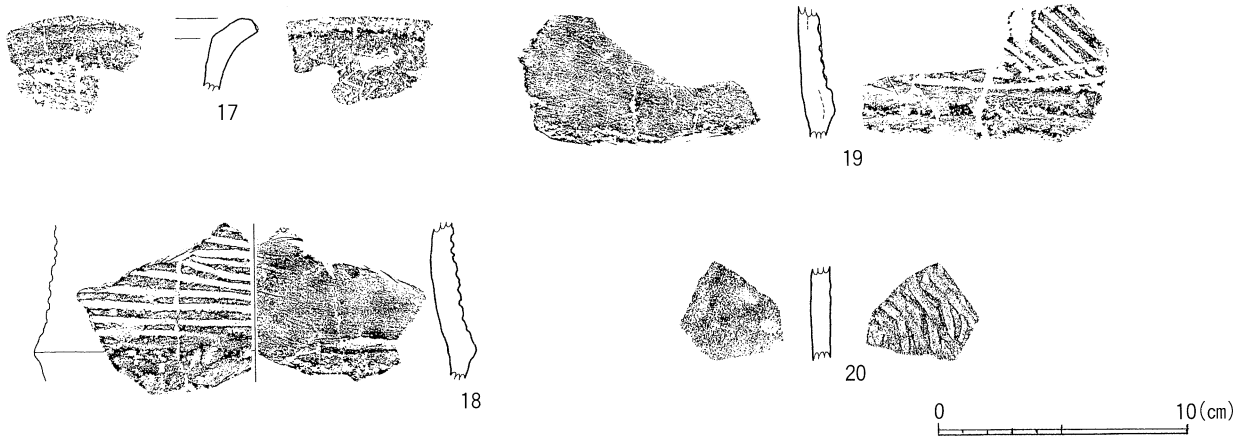


第8図　Ⅶ層出土土器実測図(2)

Ⅴ類土器（第９図17～20）

いわゆる「手向山式土器」と思われるものをここにまとめた。

17は壷形土器の口縁部とみられ、外器面に縦方向の山形押形文がみられる。18、19は胴部中央の屈曲する部分とみられ、上半部に斜・横方向の沈線がめぐる。20は外面に山形押形文がくずれたような浅い沈線がみられ、同類とみてここに含めた。



第９図　Ⅶ層出土土器実測図(3)

第４表　土器観察表(3)

No	挿図	図版	出土地点	文様・調整		色調		胎土	焼成	備考
				外面	内面	外面	内面			
17	第９図	6	Ⅶ	縦方向の山形押型文	荒いナデ	にぶい橙(7.5YR6/4)	にぶい橙(7.5YR6/4)	2㎜以下の灰白、灰色、褐色の砂粒、雲母を多く含む	良好	
18	〃	6	〃	横方向の沈線文、ナデ	ナデ	橙(7.5YR7/6) にぶい黄橙(10YR7/4)	浅黄(2.5Y7/4)	4㎜以下の乳白色、2.5㎜以下の灰色の砂粒、1㎜以下の雲母を含む	〃	
19	〃	6	〃	横及び斜め方向の沈線文、ナデ	ナデ	橙(7.5YR6/6)	にぶい黄橙(10YR7/4)	3.5㎜以下の乳白色の砂粒、1㎜以下の角閃石、石英を含む	〃	
20	〃	6	〃	浅い沈線文（山形の乱れた物か）	ナデ	にぶい黄橙(10YR7/4)	浅黄(2.5Y7/3)	1.5㎜以下の赤褐色、灰色、褐色の砂粒、1㎜以下の石英を含む	〃	

Ⅵ類土器（第10・11図21～41）

いわゆる「塞ノ神式土器」と呼ばれるもので、ここではその施文や器形から口縁部付近を４つ、胴部を３つに細分した。

ａ類（第10図21～24）

胴部上位で強く屈曲し、屈曲部から口縁部までの施文帯に貝殻復縁による刺突文がめぐるもので、基本的には口唇部と屈曲部にも貝殻復縁による刺突文がめぐるが、22の口唇部には刺突文がみられない。また、24は施文帯の刺突文の間に条痕文がみられる。

ｂ類（第10図25～28）

口唇部と胴部上位の屈曲部に貝殻復縁による刺突文を施す点や器形はａ類と同様だが、施文帯に沈線のみがみられるものをｂ類とした。ただし、28はなだらかに内湾した胴部から緩やかに外反した口縁部へとつながり、最大径を胴部にもつ点で器形的に他者と異なる。

ｃ類（第10図29～31）

施文原理や器形的にはｂ類と同じだが、施文具に貝殻以外のものを採用したものである。

ｄ類（第11図38）

わずかに外反しながら口縁部へと続き、胴部上位での屈曲や外反はみられない。器形的にはおそら

く円筒形を呈するとみられ、口縁部は波状口縁である。口唇部に刺突文、口縁部以下に2状の押し引き文がみられ、いづれも貝殻以外の施文具によって施されている。この押し引き文の下段を一部切るかたちで鋭い沈線が施文幅（区画）を意識したように斜め方向に施されている。この土器は施文原理において他のものに近いが、施文具や器形がかなり異なるため、いわゆる「塞ノ神式土器」には含まれない可能性もある。

e類（第11図32～35）

胴部の施文が横またはやや斜め方向で、区画を意識した条痕文によって構成されたものである。32、33は屈曲部に貝殻刺突文を伴うが、条痕文は同一区画内において深度や幅などにばらつきがあるため、施文具が貝殻でない可能性がある。34、35の施文具も貝殻でない可能性が高い。

f類（第11図36～37）

胴部の施文において明らかに沈線による区画がみられるもので、区画された沈線間には斜め方向の沈線が施されている。36は屈曲部上位の外面に貝殻復縁による押し引き文、内面に条痕文がみられる。

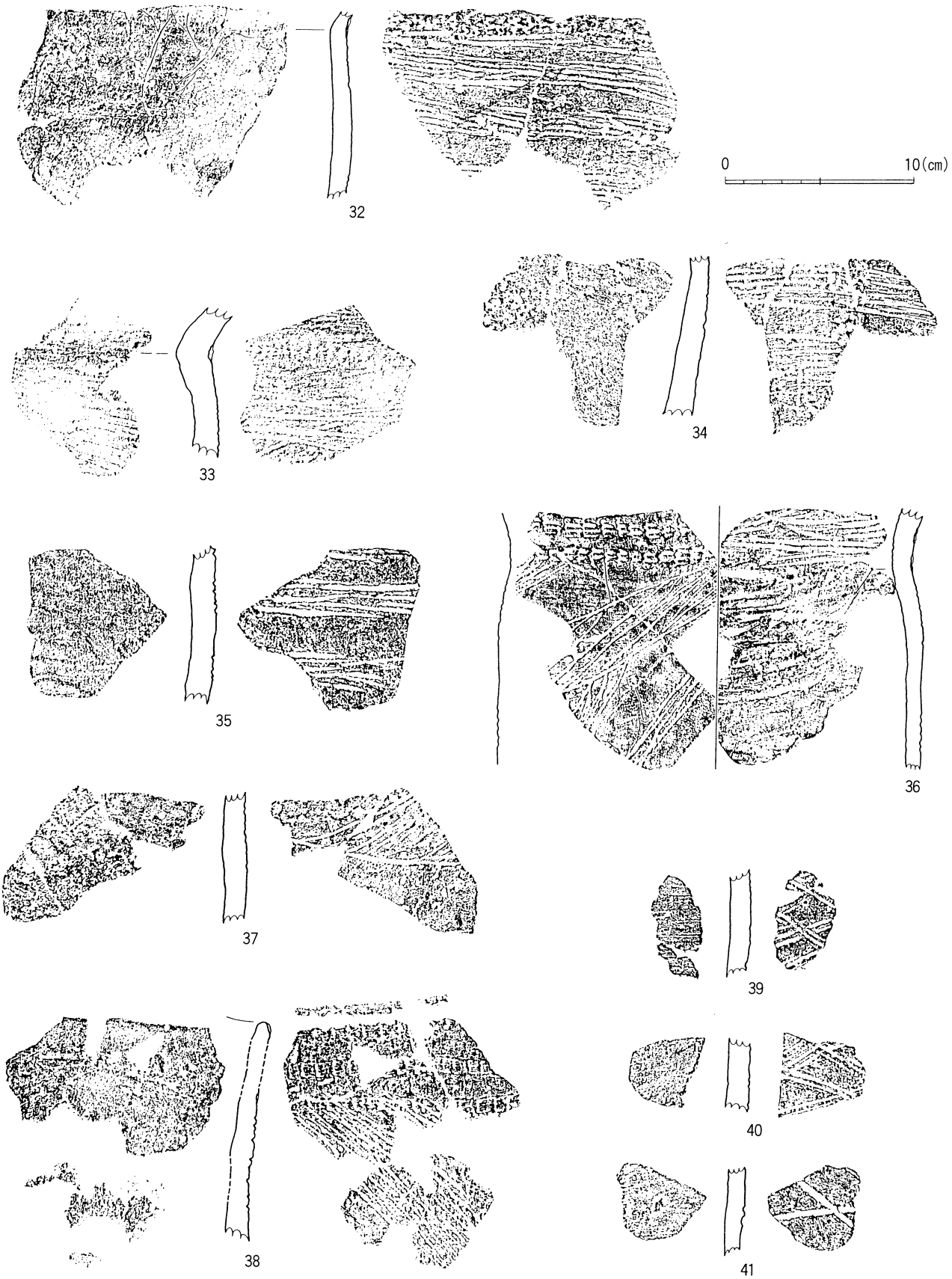
g類（第11図39～41）

胴部に交差した条痕文が施されたものである。このような施文はいわゆる「塞ノ神式土器」にしばしばみられるものであるため、ここに含めた。

第5表　土器観察表(4)

No	挿図	図版	出土地点	文様・調整		色調		胎土	焼成	備考
				外面	内面	外面	内面			
21	第10図	6	Ⅶ	貝殻復縁による刺突文、ナデ	ナデ、削り	橙(5YR7/6)	にぶい赤褐(5YR5/4)	8㎜以下の白色、1㎜以下の黒色の砂粒、石英を含む	良好	
22	〃	6	〃	貝殻復縁による刺突文	ナデ	灰黄褐(10YR4/2)	にぶい黄褐(10YR5/4)	2㎜以下の雲母、1㎜以下の乳白色の砂粒を含む	〃	
23	〃	6	〃	貝殻復縁による刺突文	ナデ	褐(7.5YR4/3) 灰褐(7.5YR4/2)	褐灰(7.5YR4/1) 灰黄褐(10YR5/2)	2㎜以下の褐色、乳白色の砂粒石英を含む	〃	
24	〃	6	〃	貝殻復縁による刺突文、沈線文、ナデ	ナデ、削り	にぶい黄褐(10YR5/3)	灰黄褐(10YR4/2)	2.5㎜以下の白色、乳白色の砂粒を含む	〃	
25	〃	6	〃	貝殻復縁による刺突文、沈線文、ナデ	ナデ、削り	にぶい黄橙(10YR7/4) 褐灰(10YR5/1)、橙(5YR7/6)	にぶい黄橙(10YR6/3) 〃　(10YR7/4)	8.5㎜以下の褐色、3.5㎜以下の灰白色の砂粒、1㎜以下の雲母、石英を含む	〃	
26	〃	6	〃	貝殻復縁による刺突文、沈線文、ナデ	ナデ	黒褐(2.5Y3/1)	にぶい黄褐(10YR4/3)	1㎜以下の乳白色、茶色の砂粒、石英を含む	〃	
27	〃	6	〃	貝殻復縁による刺突文、沈線文、ナデ	ナデ、削り	にぶい黄(2.5Y6/3) 黄灰(2.5Y5/1)	にぶい黄橙(10YR6/4)	3㎜以下の灰色、灰白色の砂粒、石英を含む	〃	
28	〃	6	〃	貝殻復縁による刺突文、沈線文、ナデ	ナデ	にぶい橙(7.5YR6/4)	にぶい褐(7.5YR5/4)	2㎜以下の乳白色、白色の砂粒、雲母を含む	〃	
29	〃	6	〃	刺突文、沈線文、ナデ	ナデ	にぶい黄褐(10YR5/3)	灰黄褐(10YR4/2) にぶい褐(7.5YR5/4)	4㎜以下の茶色、白色の砂粒、0.5㎜以下の石英を含む	〃	
30	〃	6	〃	刺突文、沈線文、ナデ	ナデ	橙(5YR6/6)	黄褐(2.5Y5/3)	1㎜以下の褐色、赤褐色、石英を含む	〃	
31	〃	6	〃	刺突文、沈線文、ナデ	ナデ	灰白(7.5YR8/2)	灰黄褐(10YR5/2)	1.5㎜以下の乳白色の砂粒、1㎜以下の石英を含む	〃	
32	第11図	6	〃	貝殻復縁による刺突文、沈線文、ナデ	ナデ	赤褐(5YR4/6)	黒褐(10YR3/1)	6㎜以下の灰白色、赤褐色、褐色の砂粒、2㎜以下の石英を含む	〃	
33	〃	7	〃	貝殻復縁による刺突文、沈線文、ナデ	ナデ、荒いナデ	黄灰(2.5Y4/1)	にぶい黄橙(10YR6/4)	1㎜以下の灰白色、赤褐色の砂粒、石英を含む	〃	
34	〃	7	〃	沈線文、ナデ	ナデ	にぶい橙(7.5YR7/3)	にぶい黄橙(10YR7/2)	1㎜以下の乳白色の砂粒、石英を含む	〃	
35	〃	7	〃	沈線文、ナデ	ナデ	橙(5YR6/6) 灰黄褐(10YR4/2)	灰黄褐(10YR4/2)	3㎜以下の乳白色、白色の砂粒、2㎜以下の石英を含む	〃	
36	〃	7	〃	貝殻復縁による刺突文、沈線文、ナデ	条痕、荒いナデ	褐灰(10YR4/1) にぶい褐(7.5YR5/3)	にぶい褐(7.5YR5/3)	3㎜以下の灰白色、褐色、淡茶色の砂粒、2.5㎜以下の石英、2㎜以下の角閃石を含む	〃	
37	〃	7	〃	沈線文、ナデ	ナデ	橙(5YR6/6)	にぶい黄橙(10YR6/4)	5㎜以下の灰白色、黒色、橙色の砂粒、2.5㎜以下の石英を含む	〃	
38	〃	7	〃	刺突文、押し引き文、沈線文、ナデ	ナデ	にぶい赤褐(5YR5/4)	明赤褐(5YR5/6)	1.5㎜以下の白色、褐色の砂粒、1㎜以下の石英を含む	〃	
39	〃	7	〃	交差状の沈線文、ナデ	削り	暗赤褐(5YR3/4)	暗褐(7.5YR3/3)	1.5㎜以下の白色の砂粒、1㎜以下の角閃石を含む	〃	
40	〃	7	〃	交差状の沈線文、ナデ	ナデ	明赤褐(5YR5/6)	にぶい褐(7.5YR5/4)	5㎜以下の褐色、灰白色の砂粒、1㎜以下の雲母を含む	〃	
41	〃	7	〃	交差状の沈線文、ナデ	ナデ	明赤褐(2.5YR5/6)	にぶい赤褐(2.5YR4/3	2㎜以下の乳白色、橙色の砂粒、1㎜以下の石英を含む	〃	

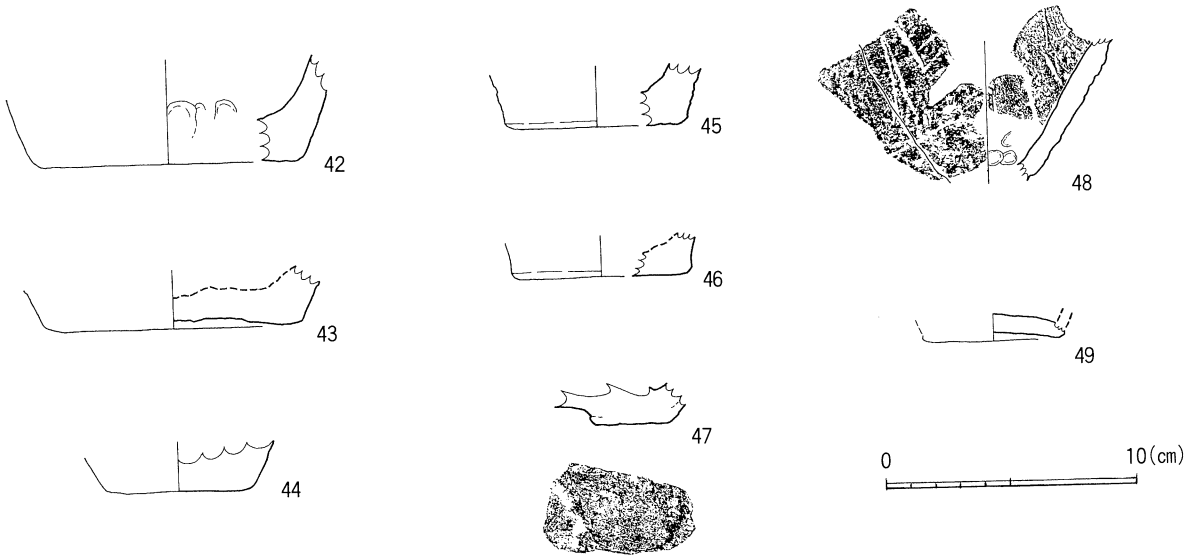
第10図　Ⅷ層出土土器実測図(4)



第11図　Ⅶ層出土土器実測図(5)

底部（第12図42～49）

第Ⅶ層出土の底部はいずれも破片が小さく、前述のどの類の土器に伴うものか不明である。42～46は概ね平底を呈する。47は底部の外側にドーナツ状に粘土を張り付けたような状態で、中央部がくぼんでいる。48は底部付近で、形態には尖底状になるとみられ、外面には鋭い沈線文がみられる。49はわずかな上げ底で、器壁が他のものに比べて薄い。



第12図　Ⅶ層出土土器実測図(6)

第6表　土器観察表(5)

No	挿図	図版	出土地点	文様・調整		色調		胎土	焼成	備考
				外面	内面	外面	内面			
42	第12図	7	Ⅶ	ナデ	ナデ、指押え	浅黄橙(10YR8/3) 灰黄(2.5Y7/2)	浅黄(2.5Y7/3)	6.5㎜以下の灰黄色、灰白色、褐色の砂粒、2㎜以下の角閃石、石英を含む	良好	
43	〃	7	〃	ナデ	不明	灰白(2.5Y8/2)	淡黄(2.5Y8/3)	1㎜以下の白色、灰白色の砂粒、2㎜以下の雲母、石英を多く含む	〃	
44	〃	7	〃	ナデ	不明	明赤褐(5YR5/6)	不明	2㎜以下の乳白色、赤褐色、黒色の砂粒、1.5㎜以下の石英を含む	〃	
45	〃	7	〃	ナデ	ナデ	明赤褐(5YR5/6)	にぶい赤褐(5YR4/3)	3㎜以下の淡黄色、褐色の砂粒、1.5㎜以下の石英を含む	〃	
46	〃	7	〃	ナデ	不明	灰黄(2.5Y6/2) にぶい黄橙(10YR6/3)	にぶい橙(5YR6/4)	2㎜以下の茶褐色、灰白色の砂粒、1㎜以下の雲母、石英を多く含む	〃	
47	〃	7	〃	ナデ	ナデ	明赤褐(5YR5/6) にぶい黄褐(10YR5/3)	灰黄褐(10YR5/2)	2㎜以下の灰白色、褐色、黒色の砂粒、1.5㎜以下の石英を多く含む	〃	上底か
48	〃	7	〃	沈線文、ナデ	荒いナデ	暗灰黄(2.5Y5/2)	にぶい黄橙(10YR7/4)	1㎜以下の白色、灰色の砂粒、3㎜以下の石英、0.5㎜以下の雲母を含む	〃	
49	〃	7	〃	ナデ	不明	にぶい橙(7.5YR6/4)	灰黄(2.5Y7/2)	0.5㎜以下の淡黄色、黒色の砂粒、石英を含む	〃	

第3節　石器（第13図3～16、第14図17～19）

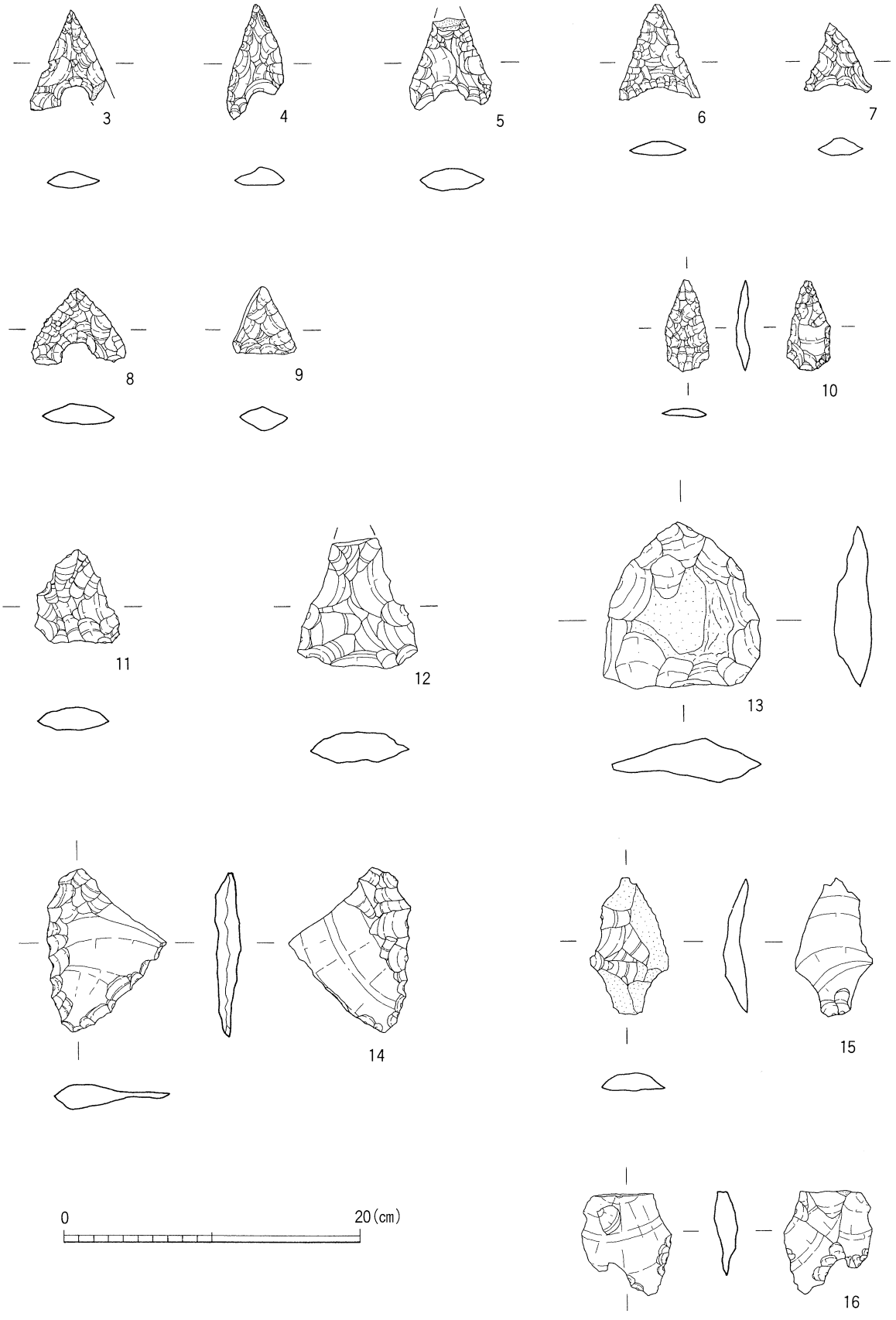
第Ⅶ層中より出土した石器は以下のとおりである。なお、詳細は計測表を参照されたい。

石鏃（第13図3～9）

3～9は石鏃である。平面的な形態では8が正三角形状である以外はほぼ二等辺三角形状である。基部形態が若干異なり、深く抉られているもの（3、4、8）、わずかに窪ませるもの（5、6、7）、直線的なもの(9)がある。

その他の石器（第13図10～16、第14図17～19）

11～13は東九州でよくみられる尖頭状石器と呼ばれるもので、石鏃よりもやや大きく、厚手である。11は黒曜石、12はチャート、13は砂岩製である。

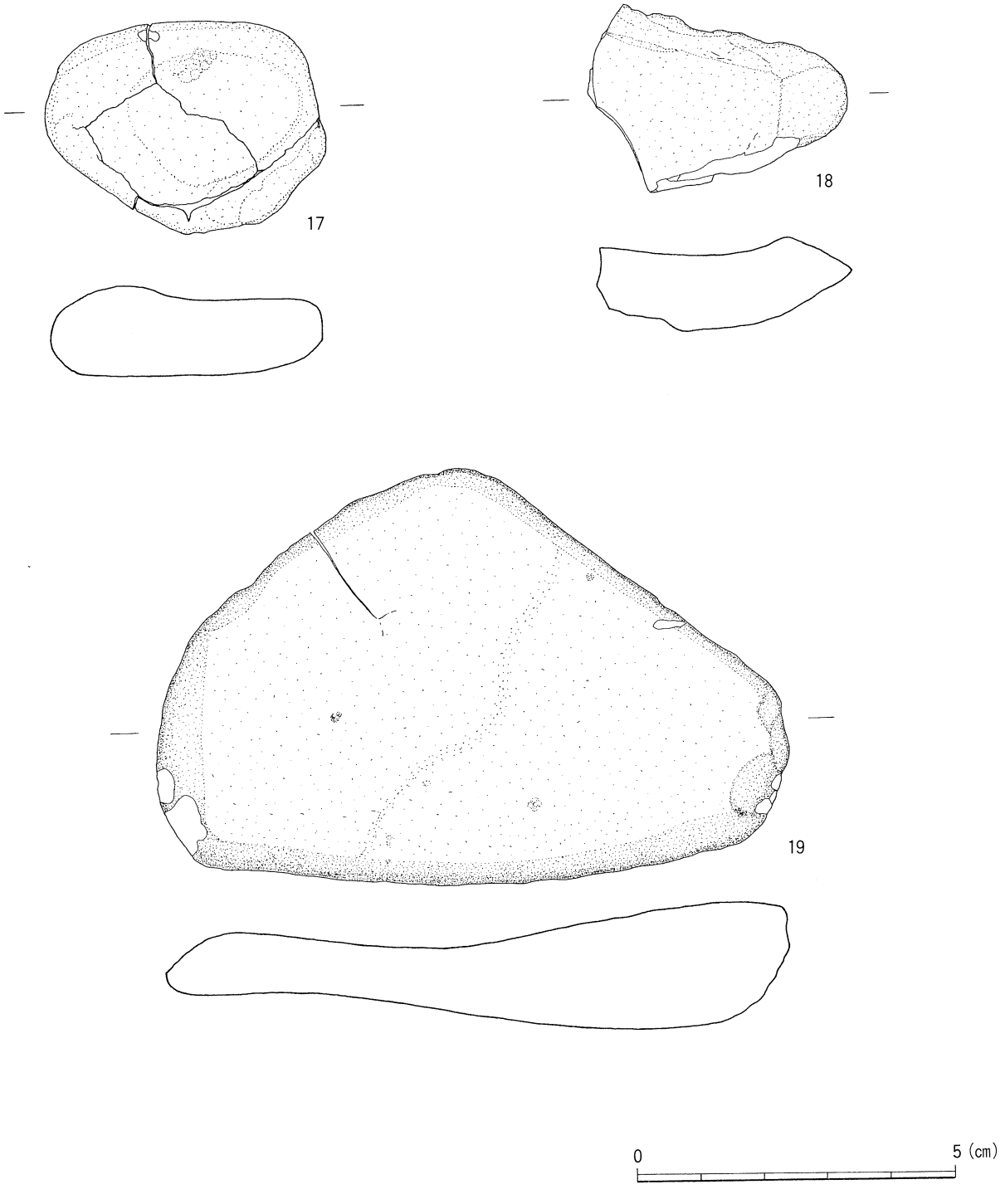


第13図　Ⅶ層出土石器実測図(1)

15は削器とみられ、一側面と一部に両面から、他の一側面に片面から調整を施したものである。石材はチャートである。

17～19は石皿とみられるが、17以外には明瞭な使用痕跡はみられない。また、すべて砂岩製で17は比熱をうけたためか赤く変色し、ひび割れている。

10は黒曜石製で側辺全てに調整を施している。14、16は剝片の一部に調整がみられ、共に主要剝離面と打点を残している。



第14図　Ⅶ層出土石器実測図(2)

第７表　石器観察表(2)

No	挿図	図版	器種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
3	第13図	8	石鏃	チャート	1.6	1.3	0.3	0.4	
4	〃	〃	〃	黒曜石	1.9	0.9	0.3	0.4	
5	〃	〃	〃	頁岩	1.5	1.4	0.4	0.7	
6	〃	〃	〃	黒曜石	1.6	1.4	0.25	0.3	
7	〃	〃	〃	姫島産黒曜石	1.2	1.1	0.3	0.2	
8	〃	〃	〃	黒曜石	1.3	1.6	0.3	0.4	
9	〃	〃	〃	姫島産黒曜石	1.2	1.1	0.4	0.3	
10	〃	〃		黒曜石	1.6	0.8	0.2	0.1	
11	〃	〃	尖頭状石器	〃	1.7	1.4	0.4	0.8	
12	〃	〃	〃	チャート	2.3	2.0	0.5	2.0	
13	〃	〃	〃	細粒砂岩	2.9	2.7	0.7	6.0	
14	〃	〃	二次加工剥片	黒曜石	2.4	1.3	0.3	0.7	
15	〃	〃	スクレイパー	細粒砂岩	2.8	2.0	0.4	1.6	
16	〃	〃	使用痕剥片	黒曜石	1.7	1.6	0.4	0.9	
17	〃	〃	磨石	砂岩	13.5	17.5	5.7	1,660	
18	〃	〃	石皿	〃	11.9	16.4	4.7	1,260	
19	〃	〃	〃	〃	26.8	40.5	8.0	8,550	

第Ⅳ章　Ⅳ層の遺構と遺物

第１節　遺構

第Ⅳ層の遺構に関してはすべてⅤ層上面において検出した。検出した遺構に土坑と集石遺構があるが、実際に遺構が構築された面はⅤ層上面よりも若干上のⅣ層下位である可能性が高い。

土坑（第16図）

土坑は３基検出された。３基とも黄褐色土（Ⅲ層とⅣ層の混合土）のみで埋没しており、遺物もなかったことから性格・時期などは不明である。

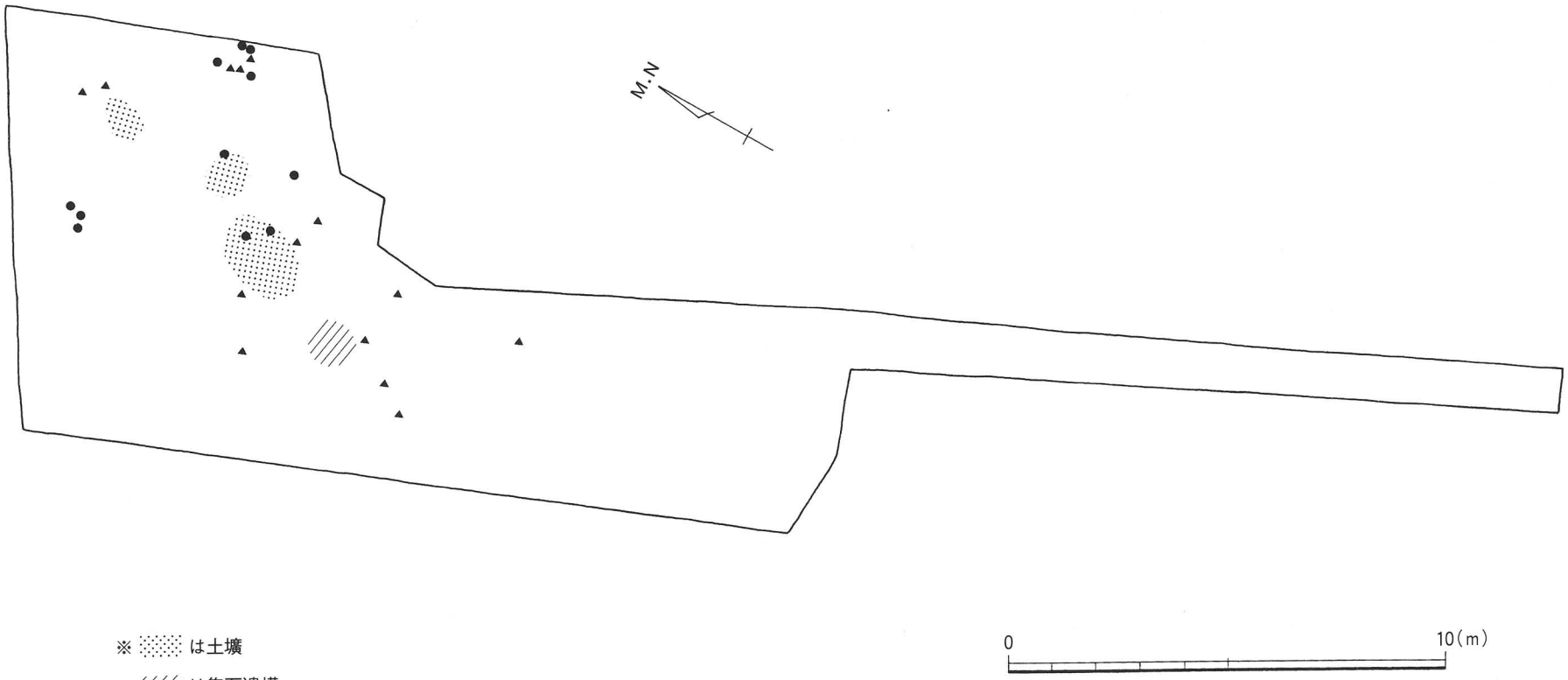
１号土坑（ＳＣ－１）は長径1.1ｍ、短径0.75ｍのやや不整形な楕円形プランを呈し、深さ0.29ｍを計る。

２号土坑（ＳＣ－２）は長径1.15ｍ、短径0.93ｍの楕円形プランを呈し、南側壁際に小さなテラスと西側床面に不整形な落ち込みを伴う。深さは、西側落ち込み部で0.23ｍ、その他の床面で0.15ｍを計る。

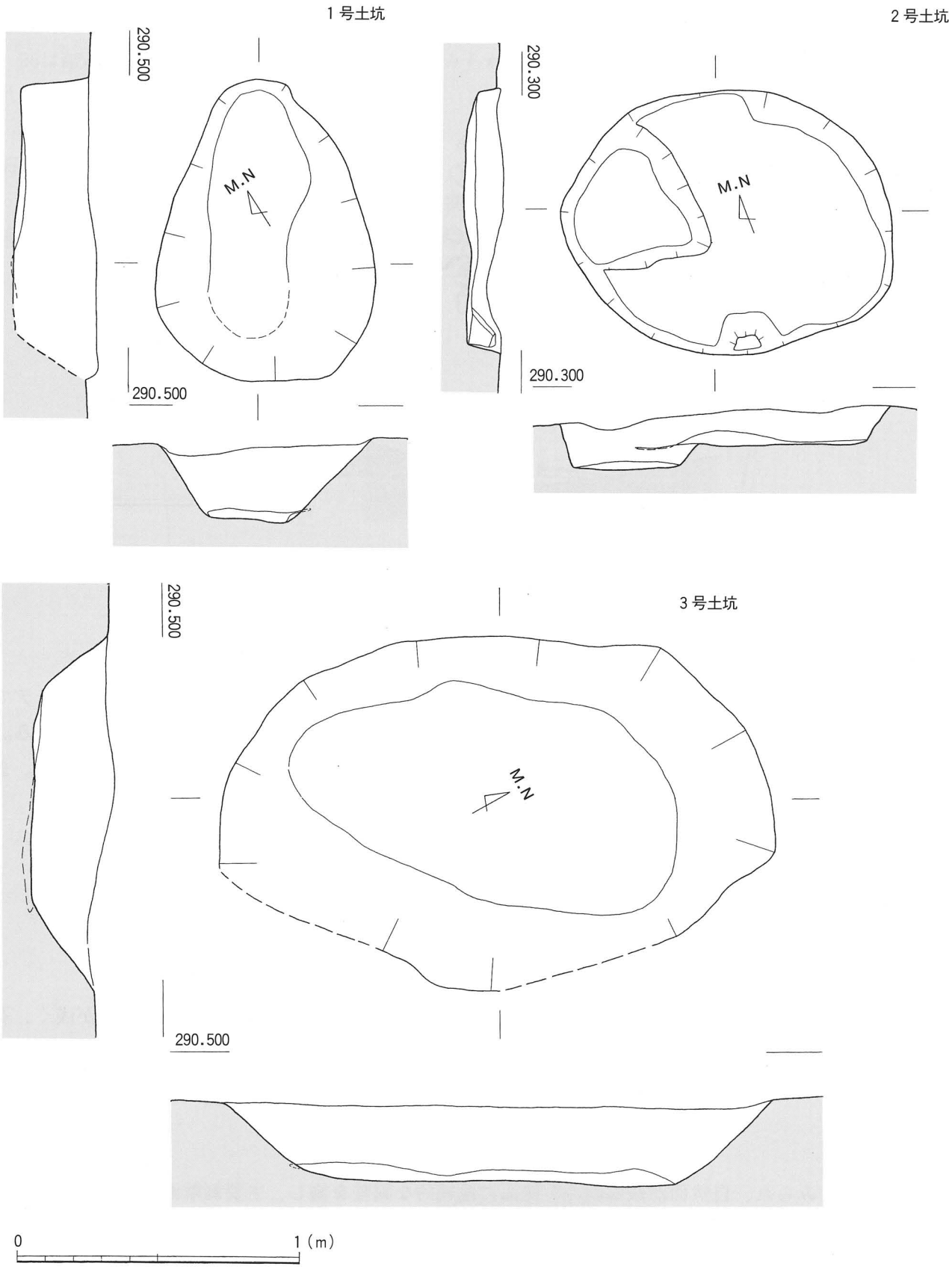
３号土坑（ＳＣ－３）は長径1.95ｍ、短径1.26ｍの楕円形プランを呈し、深さ0.3ｍを計る。この土坑は他の２基と比較するとかなり大きい。

２号集石遺構（第17図）

集石遺構は１基検出された。検出面において長径0.75ｍ、短径0.56ｍ、深さ0.1ｍのやや不整形な楕円形プランの浅い堀込みを持つ。ただし、実測図からも明らかなように掘り込みは検出面よりも高い位置から掘られていた可能性が高い。この掘り込みの埋土は若干の炭化物とⅤ層ブロックを含む暗黄灰色土であった。集石を構成する礫は、円礫・角礫で10㎝前後のものが多く、赤変していた。また、掘り込みを持つ集石としては、南西側以外はかなり乱れた形態をしているという印象を受けた。



第15図　Ⅳ層検出遺構及び出土遺物分布図



第16図　Ⅳ層検出遺構実測図(1)

第17図　Ⅳ層検出遺構実測図(2)

第2節　土器（第18図50）

第Ⅳ層から出土した土器として図化できたものは1点のみであった。

50はいわゆる春日式土器に含まれるものとみられる。器面調整は内外面ともに貝殻条痕文とナデであり、口縁部直下に貝殻復縁による刺突（一部押し引き状）を施した一条の張り付け突帯を有する。口縁部はほぼ直口し、わずかに波状口縁を呈する。口唇部は平坦に近く、端部に刺突がみられる。また貼り付け突帯は波状を呈しており、その波頂部付近の口唇部には刺突がみられない。

第3節　石器（第19図20～26）

第Ⅳ層中にみられた石器には以下のようなものがみられた。なお、詳細は観察表を参照されたい。

石鏃（20～22）

20は2等片三角形の長身で抉りが深く、石材はチャートである。21は正三角形状で抉りが浅く、石材は黒曜石である。22は小形の二等辺三角形状で抉りが浅く、石材は姫島産黒曜石である。また、主要剥離面を多く残しており、いわゆる剥片鏃である。

削器（23）

23は削器とみられ、自然面が残る面の1側面に連続的な調整を施し、主要剥離面が残る面には部分的な調整がみられる。石材は黒曜石である。

石核（24）

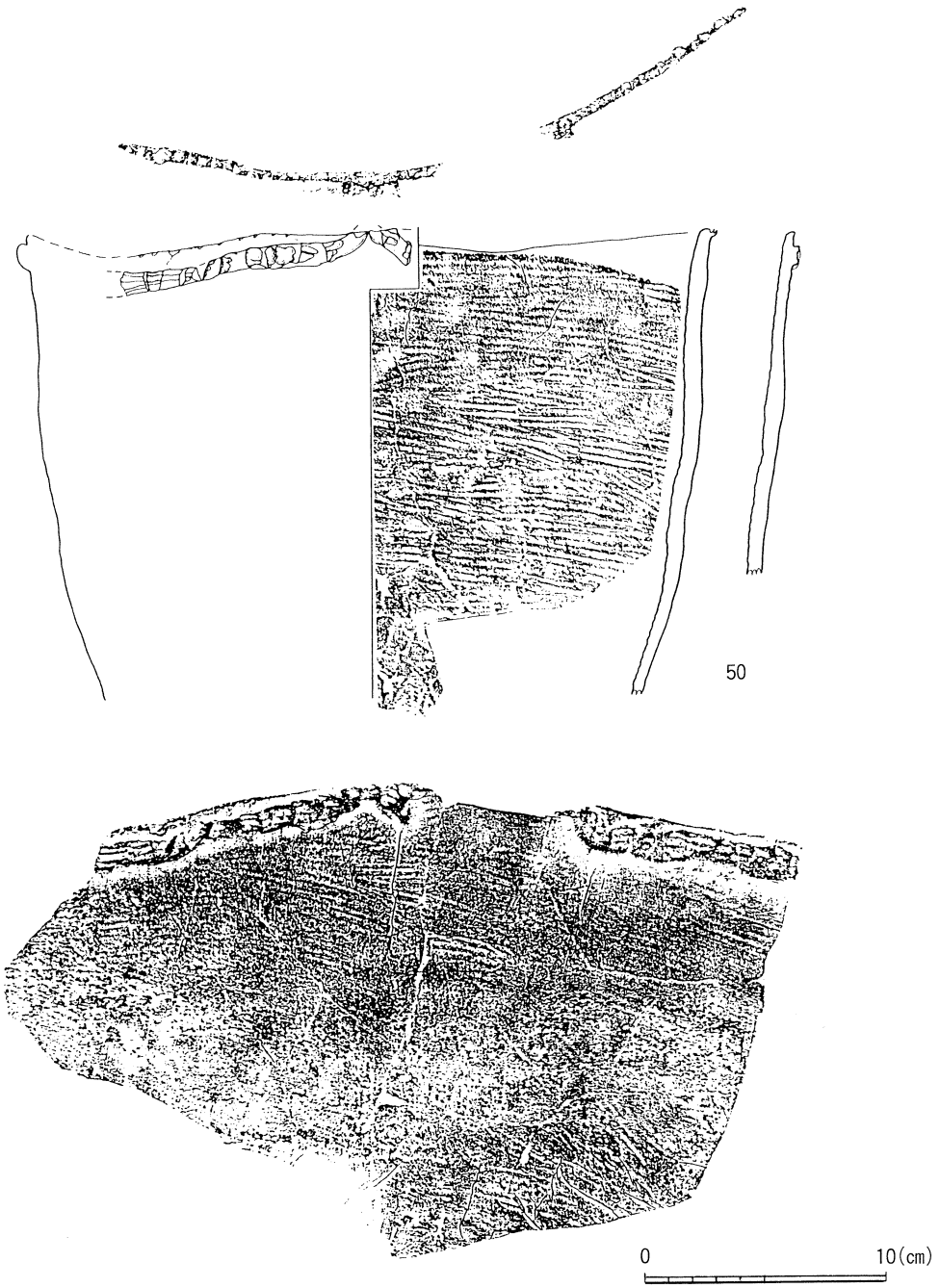
24は石核とみられ、打面を頻繁に転移しながら剥片をとっている。

敲石（25）

25は敲石とみられ、側面に２カ所の敲打痕がみられるが、磨石の用途に使用された可能性も考えられる。石材は砂岩である。

石皿（26）

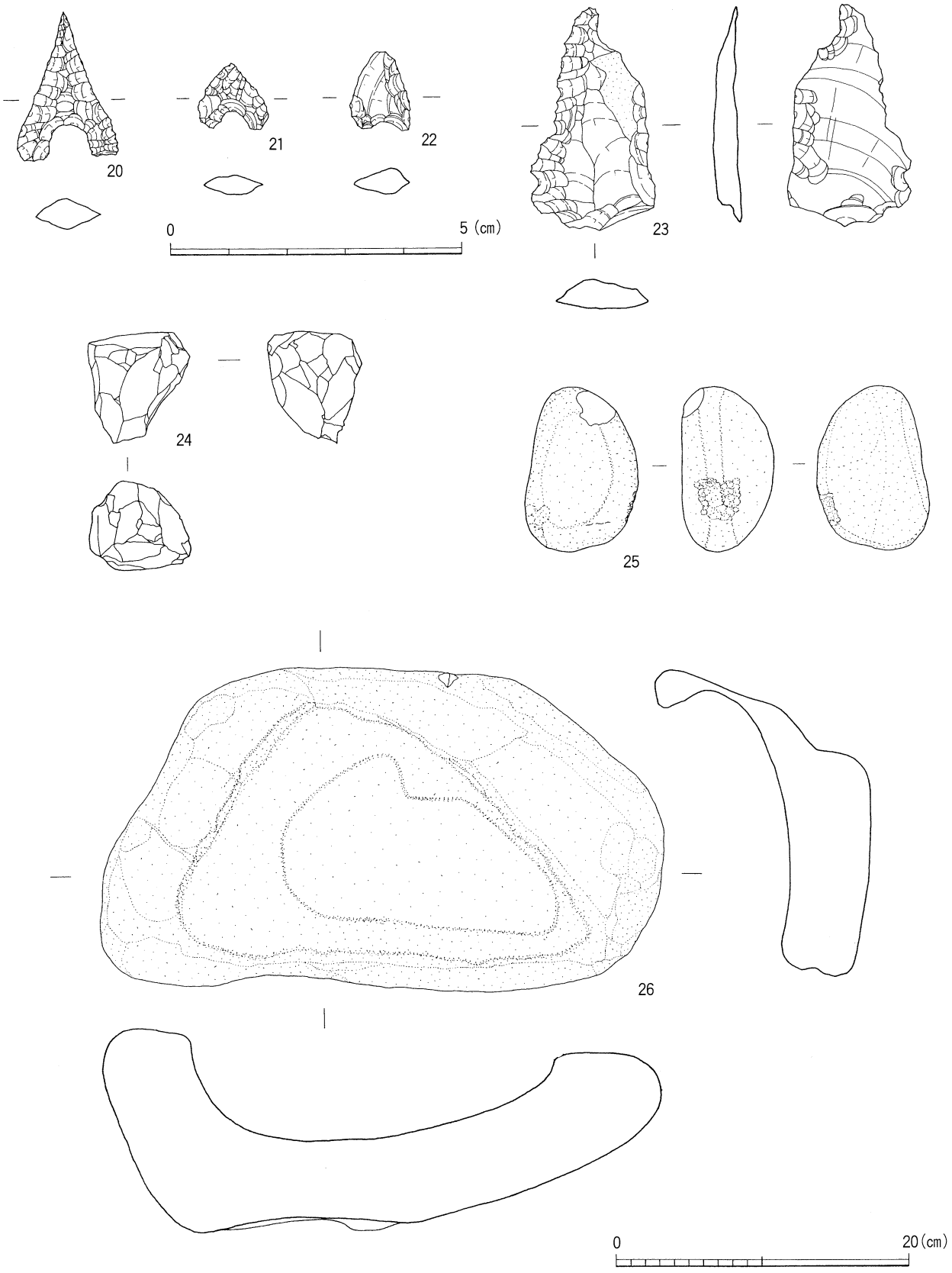
26は表面がかなり摩耗しており、明確な使用痕跡は判然としないが、その形状から石皿としての用途が考えられたためここにあげた。石材は砂岩である。



第18図　Ⅳ層出土土器実測図

第８表　土器観察表(6)

No	挿図	図版	出土地点	文様・調整		色調		胎土	焼成	備考
				外面	内面	外面	内面			
50	第18図	8	Ⅳ	貝殻復縁による刺突・押引きを施した貼付突帯、刺突文、貝殻条痕	貝殻条痕	黒褐(2.5Y3/1)	オリーブ褐(2.5Y4/3)	3㎜以下の灰褐色、浅黄色の砂粒を含む	良好	外面に多量のスス付着



※　20～23は1/1、24～26は1/4

第19図　Ⅳ層出土石器実測図

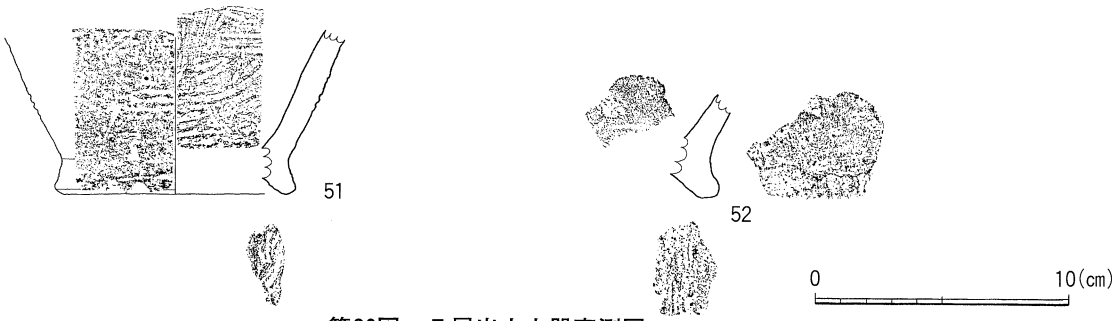
第９表　石器観察表(3)

No	挿　図	図　版	器　種	石　材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重　量(g)	備　考
20	第19図	8	石鏃	チャート	2.5	1.7	0.5	1.0	
21	〃	〃	〃	姫島産黒曜石	1.4	1.0	0.4	0.4	
22	〃	〃	〃	黒曜石	1.2	1.2	0.4	0.3	
23	〃	〃	スクレイパー	〃	3.8	2.1	0.5	4.5	
24	〃	9	石核	泥岩	7.75	7	5.6	200	
25	〃	〃	敲石	砂岩	11.4	7.75	6.3	700	
26	〃	〃	石皿	〃	38.9	22.6	16.4	11500	

第Ⅴ章　Ⅱ層の遺構と遺物

第Ⅱ章で述べたように、Ⅱ層からは数点の土器片が出土したのみで、遺構などは確認されなかった。図化できたものは以下の２点である。

51、52はともに底部で上げ底である。51は内・外面に貝殻条痕がみられる。



第20図　Ⅱ層出土土器実測図

第10表　土器観察表(7)

No	挿図	図版	出土地点	文様・調整		色調		胎　土	焼成	備　考
				外　面	内　面	外　面	内　面			
51	第20図	9	Ⅱ	貝殻条痕、ナデ	貝殻条痕	にぶい黄橙(10YR6/4) 橙(7.5YR6/6)	にぶい黄橙(10YR6/4)	2㎜以下の乳白色、褐色の砂粒、2.5㎜以下の石英を含む	良好	
52	〃	〃	〃	ナデ	ナデ	灰白(5Y7/2) 灰(5Y6/1)	灰(5Y5/1)	5㎜以下の褐色、灰白色、淡黄色の砂粒、1㎜以下の石英を多く含む	〃	

第Ⅵ章　おわりに

今回の調査では、狭い面積に対して比較的多くの縄文時代早期の遺物が出土した。この中でも大半を占めるのは下剝峰式土器と塞ノ神式土器であった。

当遺跡が所在する田野町周辺では、豊富なバリエーションの下剝峰式土器がみられる。今回出土したものは３つに分類したが、近隣の遺跡出土資料とともに施文や形態についてさらに分類を深化させる必要がある。

また、塞ノ神式土器では「撚糸文系」は１点もみられず、ほとんどが「貝殻文系」に属する。このことは、「貝殻文系」だけで１つの時期を構成する可能性も考えられるため、最近いわれている「貝殻文系」と「撚糸文系」は並存関係ではないとする編年観を支持する例となるかもしれない。

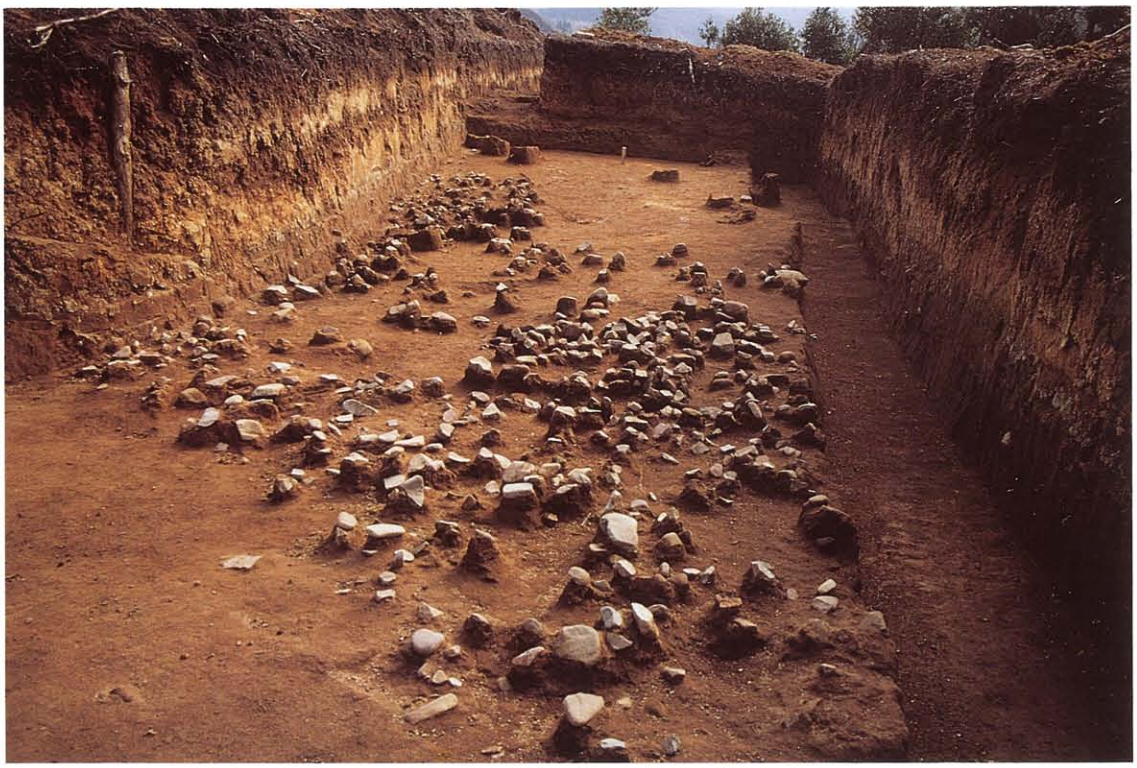
紙数の関係から、かなりおおまかな記述となったが、本報告で消化できなかった内容については、資料の増加を待って他日に期したい。

図版1

調査区遠景（南側上空から）

調査区全景（上空から）

土層断面（調査区東側）

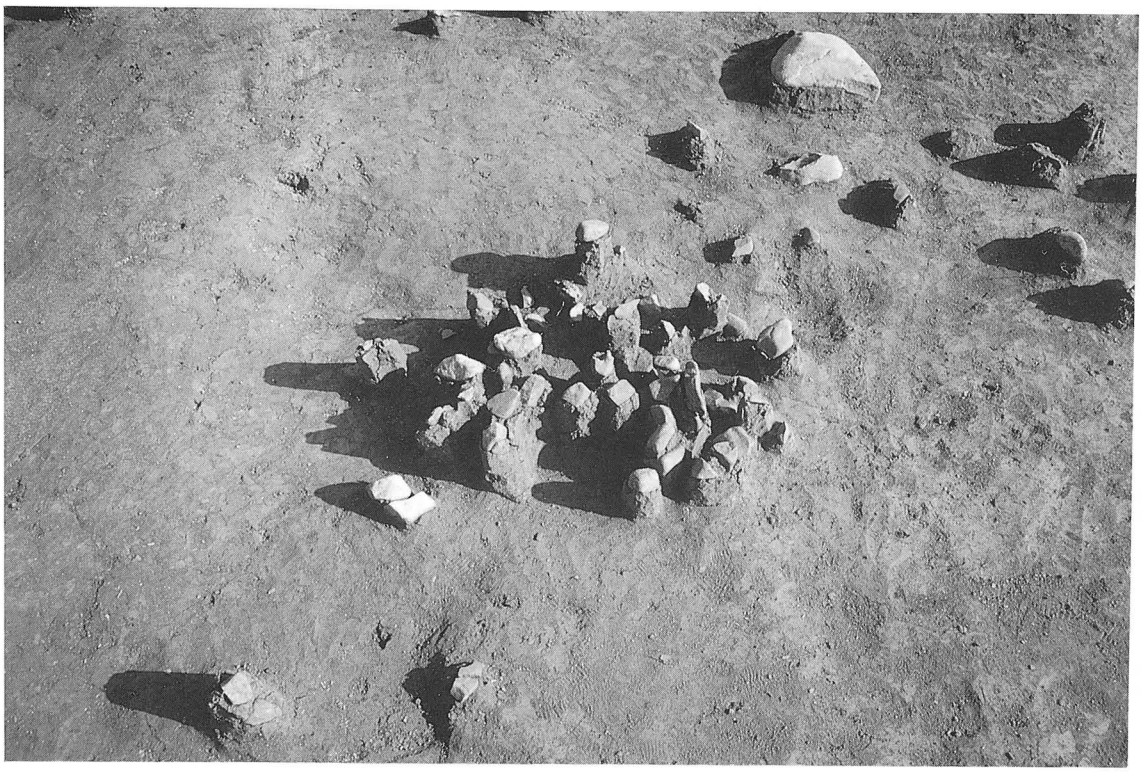


Ⅶ層礫群検出状況（北から）

図版3

配石遺構（東から）

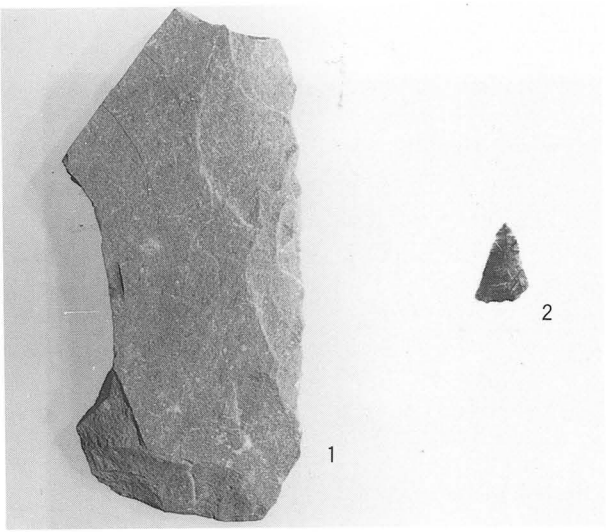
1号集石遺構（東から）



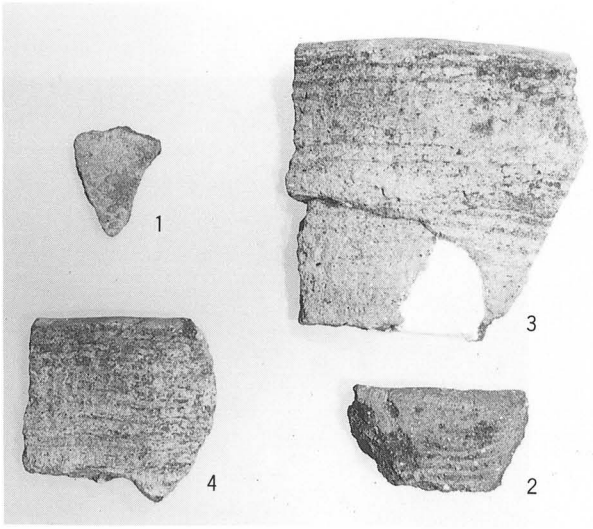
2号集石遺構（西から）

Ⅱ層及びⅣ層遺物出土状況（北から）

図版5

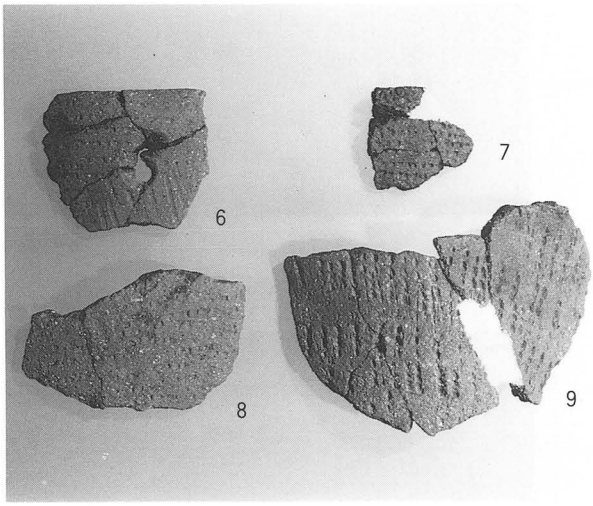


配石遺構出土石器

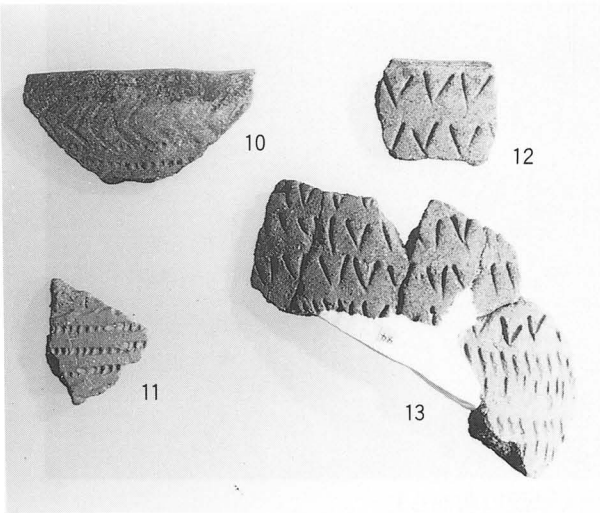


Ⅶ層出土土器（Ⅰ～Ⅱ類）

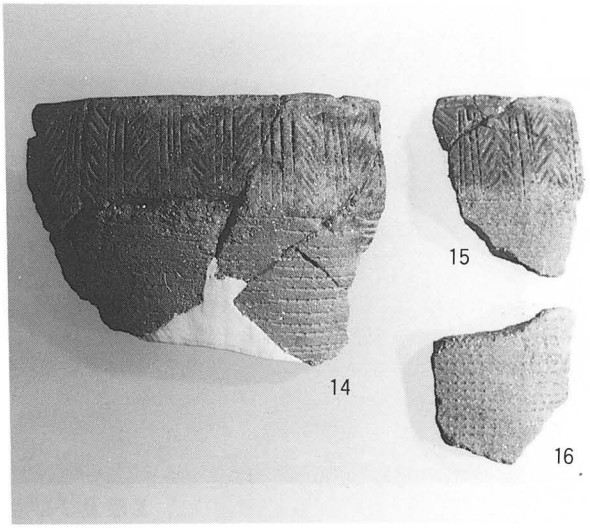
Ⅶ層出土土器（Ⅲ類）



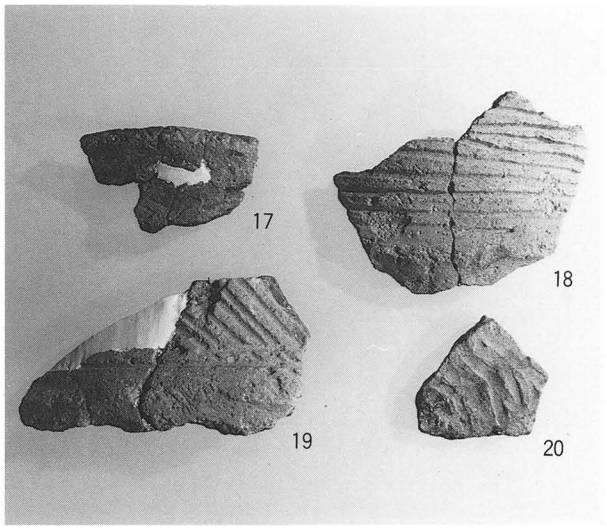
Ⅶ層出土土器（Ⅳ類）



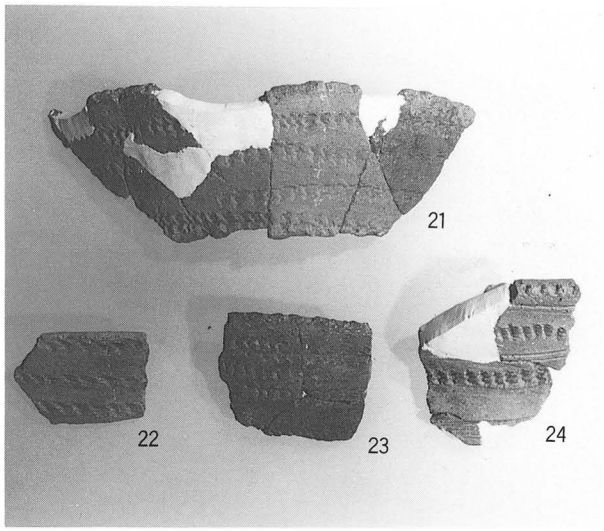
Ⅶ層出土土器（Ⅳ類）



Ⅶ層出土土器（Ⅳ類）

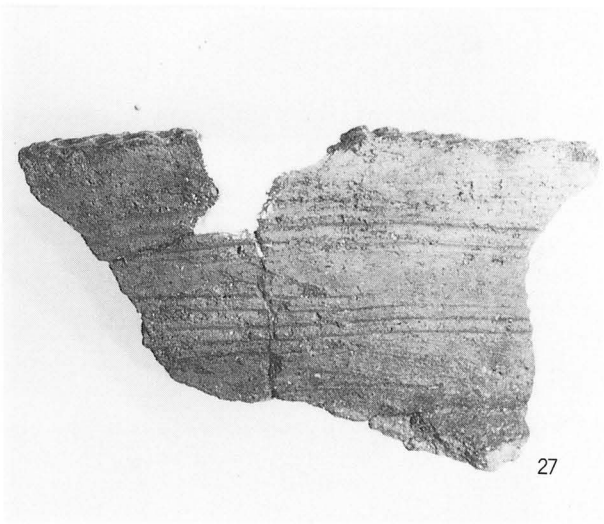


Ⅶ層出土土器（Ⅴ類）

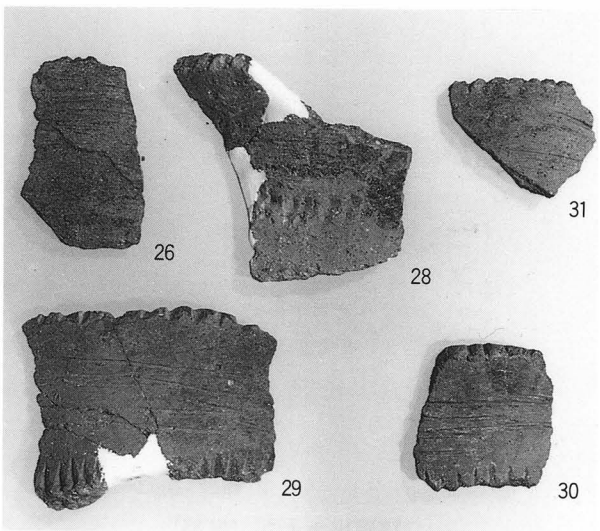


Ⅶ層出土土器（Ⅵ類）

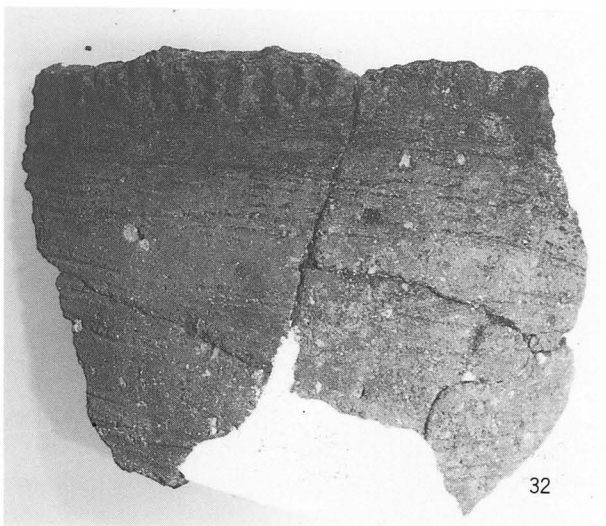
Ⅶ層出土土器（Ⅵ類）



Ⅶ層出土土器（Ⅵ類）

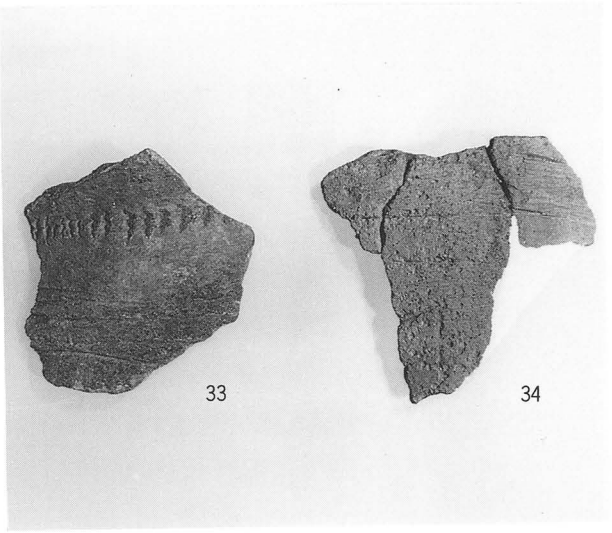


Ⅶ層出土土器（Ⅵ類）

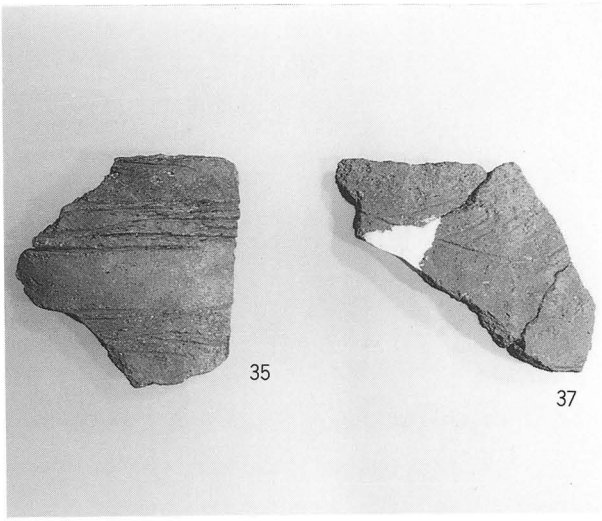


Ⅶ層出土土器（Ⅵ類）

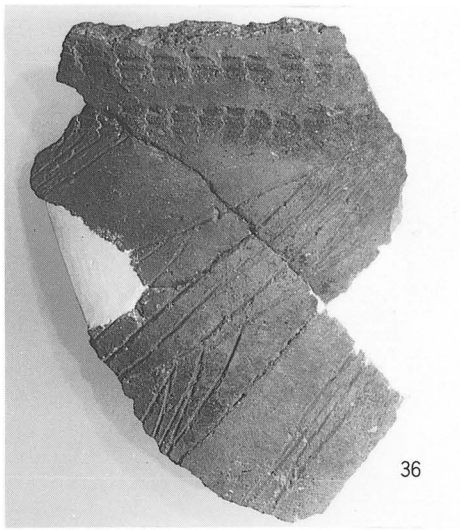
図版7



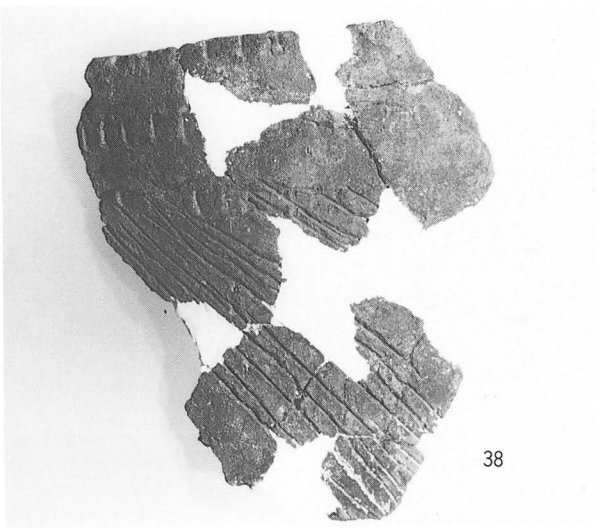
Ⅶ層出土土器（Ⅵ類）



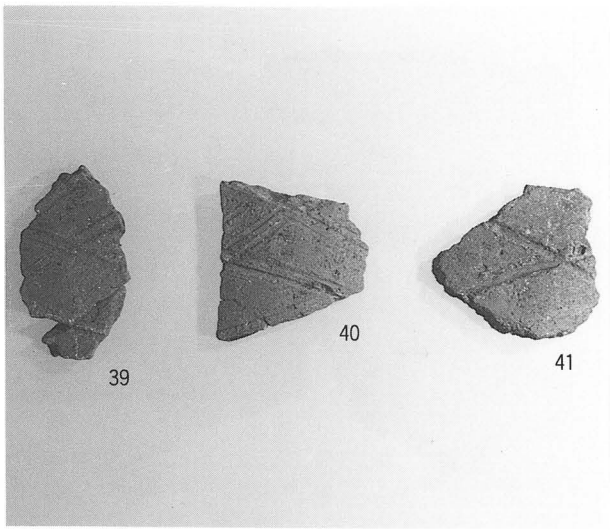
Ⅶ層出土土器（Ⅵ類）



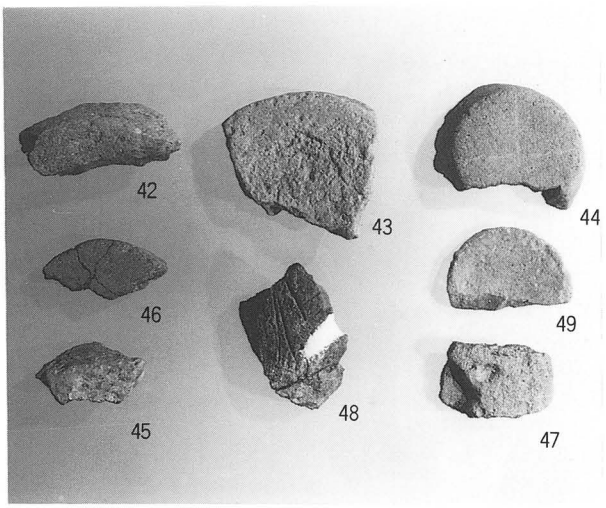
Ⅶ層出土土器（Ⅵ類）



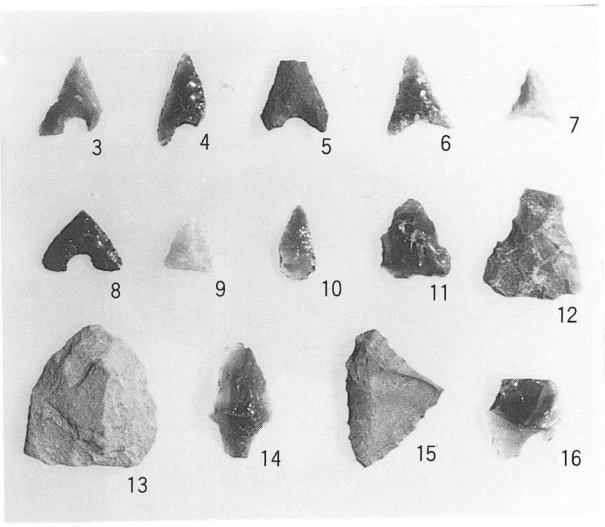
Ⅶ層出土土器（Ⅵ類）



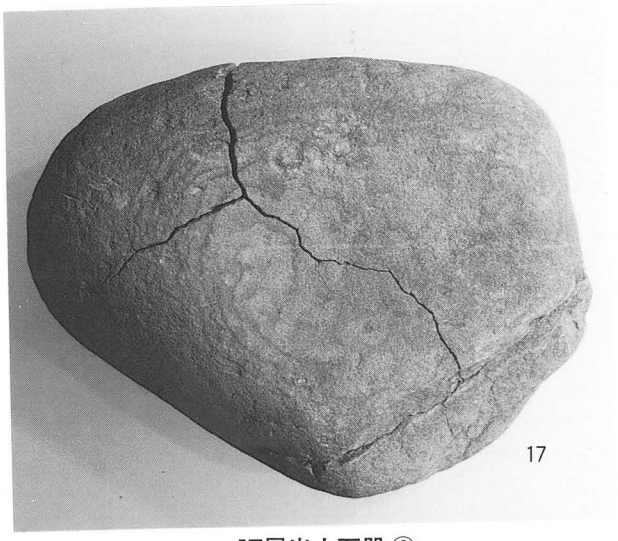
Ⅶ層出土土器（Ⅵ類）



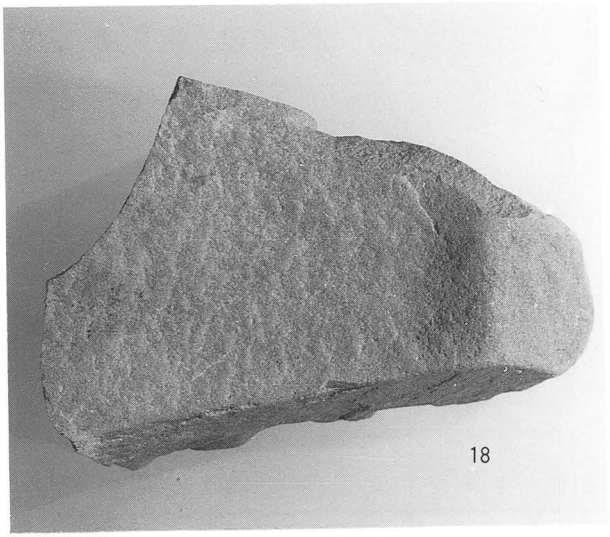
Ⅶ層出土土器（底部）



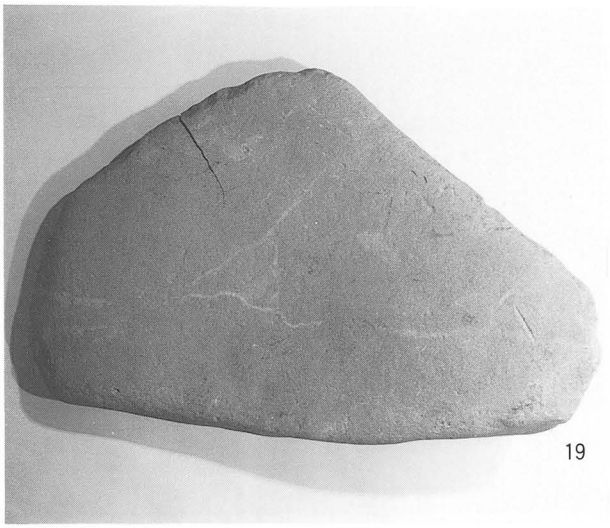
Ⅶ層出土石器 ①



Ⅶ層出土石器 ②

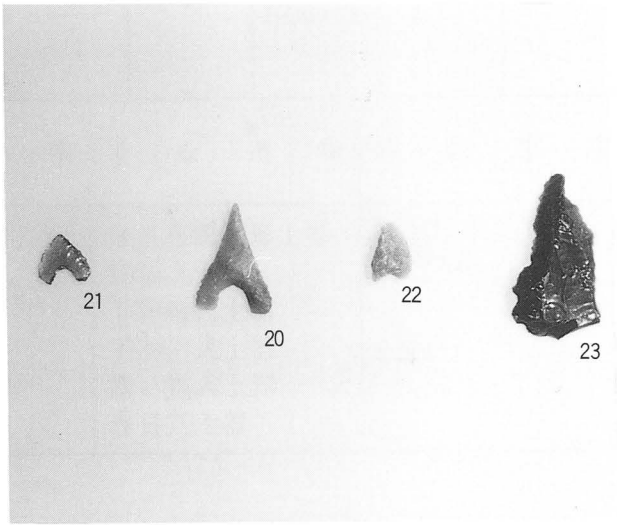


Ⅶ層出土石器 ③



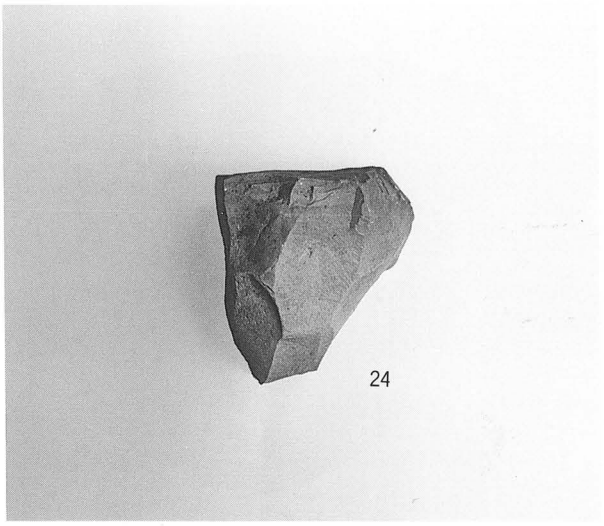
Ⅶ層出土石器 ④

Ⅳ層出土土器

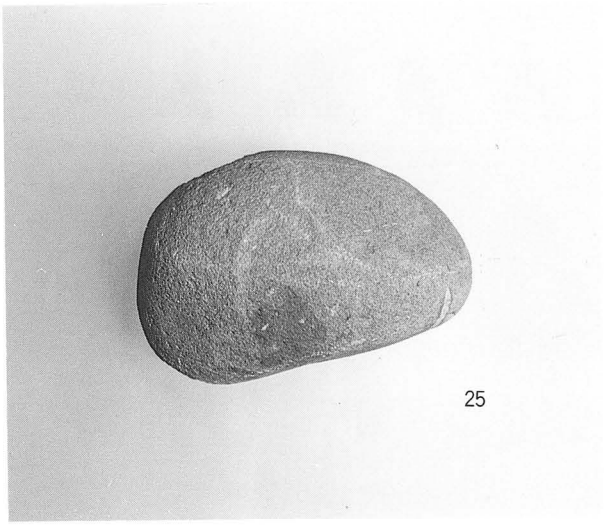


Ⅳ層出土石器 ①

図版9

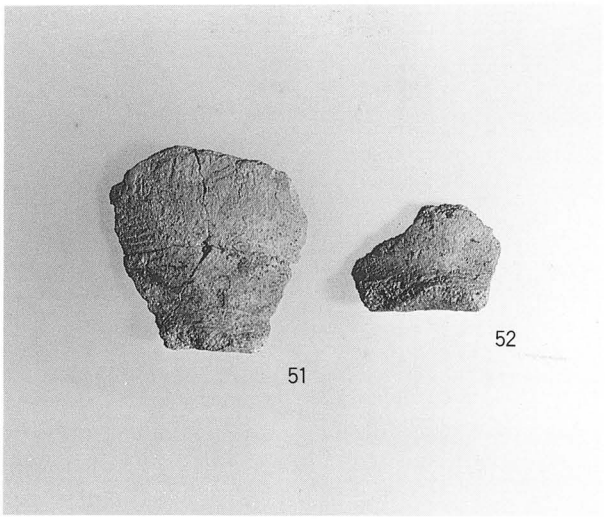


Ⅳ層出土石器②



Ⅳ層出土石器③

Ⅳ層出土石器④



Ⅱ層出土土器

報告書抄録

ふりがな	てんじんかわちだいにいせき
書名	天神河内第2遺跡
副書名	国営大淀川右岸農業水利事業天神ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	2
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	第2集
編集者	松林豊樹
発行機関	宮崎県埋蔵文化財センター
所在地	〒880　宮崎県宮崎市神宮2丁目4番4号
発行年月日	西暦1997年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m²)	調査原因
天神河内 第2遺跡	宮崎県宮崎郡 田野町大字天 神字天神河内	45302		31°48′40″	131°14′10″	19951110 ～ 19960229	420	ダム建設

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
散布地	縄文時代早期 縄文時代中期 縄文時代晩期	土坑 配石遺構 集石遺構	条痕文円筒形土器 押形文土器 下剝峰式土器 手向山式土器 塞ノ神式土器 春日式土器	

天神河内第2遺跡

大淀川右岸農業水利事業国営天神ダム
建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成9年3月

編集
発行　宮崎県埋蔵文化財センター
〒880 宮崎市神宮2丁目4－4

印刷　株式会社　都　城　印　刷
〒885 宮崎県都城市早鈴町1618番地